山の間遺跡

あかいわ山陽総合流通センター
整備事業に伴う発掘調査２

２０１７年

岡山県赤磐市教育委員会

山の間遺跡（下段）遺構検出状況（南西から）

1　竪穴住居２カマド
（南東から）

2　竪穴住居８カマド
（南東から）

3　竪穴住居10カマド
（南東から）

序

本書は、平成27年度に実施した岡山県赤磐市長尾に所在する山の間遺跡の発掘調査成果を収載しています。山の間遺跡は、赤磐、岡山両市の境界をなす丘陵から北に派生する尾根の南東斜面に位置しています。

この度、あかいわ山陽総合流通センター地区内において、民間事業者による開発事業が計画されました。赤磐市教育委員会では、遺跡の取り扱いについて関係者と協議を重ねてきましたが、やむなく記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査の結果、古墳時代を中心とする集落跡が確認されました。このうち、丘陵斜面に築かれた古墳時代の竪穴住居の中には、造り付けのカマドが非常に良く残っているもの、あるいは当時使用された土器が多く残されているものなどがあり、当時の生活を知る上で貴重な成果を得ることができました。

これらの発掘調査成果を収めた本書が、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また、地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いです。

発掘調査の実施、報告書の作成に際しましては、岡山ダイハツ販売株式会社をはじめ関係各位ならびに地元の方々から多大な御支援と御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成29年２月

赤磐市教育委員会
教育長　杉山　高志

例　言

1　本書は、あかいわ山陽総合流通センター整備事業に伴い、岡山ダイハツ販売株式会社（岡山県岡山市北区野田２－１－38）と赤磐市教育委員会の委託契約に基づき、赤磐市教育委員会が実施した山の間遺跡の発掘調査報告書である。
2　山の間遺跡は、赤磐市長尾310番地ほかに所在する。
3　確認調査は、平成25年11月18日～12月５日に、赤磐市教育委員会職員高田恭一郎、有賀祐史、畑地ひとみが行い、発掘調査は、平成27年４月２日～６月17日に、同職員金田善敬、有賀、畑地が担当して実施した。発掘調査面積は1,850㎡である。
4　本書作成のための整理作業は、平成27・28年度に赤磐市教育委員会が行った。
5　本書の執筆は、金田、有賀が担当し、全体の編集は金田が行った。
6　本書に掲載した実測図・写真等は赤磐市教育委員会（岡山県赤磐市下市337）に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。また、報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。
2　本書掲載の遺構・遺物の縮尺率は各図に記しているが、基本的には次のとおり統一している。
　竪穴住居・掘立柱建物・段状遺構・溝・柱穴列：1/60　　土坑・溝：1/30
　土器：1/4　　石製品：1/2・1/4　　土製品：1/3　　金属製品：1/3　　玉製品：1/1
3　図６、図54の遺構全体図では、遺構名について次のような略称を用いている。
　竪穴住居：竪　　掘立柱建物：建　　段状遺構：段　　土坑：土　　柱穴列：柱
4　焼土面や被熱範囲は灰色のスクリーントーンで示している。
5　遺物番号については、土器は番号だけをつけ、石製品にはS、土製品にはC、金属製品にはM、玉製品にはJを番号の前に付している。
6　掲載した土器のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。
7　土層断面図、土器観察表などに用いた土色は『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・㈶日本色彩研究所色票監修）を参考にした。
8　図２の地図は国土地理院発行1/25,000地形図「万富」「備前瀬戸」を複製・加筆したものである。
9　時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、世紀を併用しているが、古墳時代については次の時期区分を使用する（第４章参照）。
　Ⅰ期：古墳時代中期中葉（須恵器編年ＴＫ208型式）以前
　Ⅱ期：古墳時代中期後葉（ＴＫ23・47型式）
　Ⅲ期：古墳時代後期前半（ＭＴ15・ＴＫ10型式）
　Ⅳ期：古墳時代後期後半（ＭＴ85～ＴＫ209型式）

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　発掘調査の経緯と経過 …… 5

第１節　調査に至る経緯と経過 …… 5
第２節　報告書作成の経過 …… 10
第３節　日誌抄 …… 10
第４節　発掘調査及び報告書作成の体制 …… 11

第３章　発掘調査の概要 …… 12

第１節　調査の概要 …… 12
第２節　古墳時代以降の遺構と遺物 …… 15
第３節　包含層等出土の遺物 …… 50

第４章　総括 …… 53

第１節　山の間遺跡の変遷 …… 53
第２節　山の間遺跡の意義 …… 55

遺構一覧表 …… 57
遺物観察表 …… 58
遺構名称新旧対照表 …… 65
図版
報告書抄録

図 目 次

図１　遺跡位置図（1/2,000,000）…… 1
図２　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）…… 2
図３　調査区位置図（1/2,000）…… 6
図４　トレンチ平・断面図（1/80）・出土遺物
（1/3・1/4）…… 7
図５　調査区断面図（1/200）…… 12
図６　遺構全体図（1/300）…… 13・14
図７　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 15
図８　溝１（1/30）…… 16
図９　竪穴住居２、溝２・３、段状遺構１（1/60）…… 17・18
図10　竪穴住居２出土遺物（1/4）…… 19
図11　溝２・３、段状遺構１出土遺物（1/4）…… 19
図12　竪穴住居３・４（1/60）、竪穴住居３出土
遺物（1/4）…… 20
図13　竪穴住居４出土遺物（1/4）…… 21
図14　柱穴列１・２、溝４（1/60）、溝４出土遺物
（1/4）…… 22
図15　竪穴住居５、溝５（1/60）、竪穴住居５
出土遺物（1/4）…… 23
図16　竪穴住居６～９周辺遺構図（1/60）…… 24
図17　溝６・７断面図（1/60）…… 25
図18　遺構変遷模式図 …… 25
図19　竪穴住居７出土遺物（1/4）…… 25
図20　竪穴住居８出土遺物（1/4）…… 26
図21　竪穴住居９出土遺物（1/3・1/4）…… 27
図22　溝７出土遺物（1/4）…… 27
図23　柱穴列３（1/60）・出土遺物（1/3）…… 28
図24　土坑２（1/30）…… 28
図25　竪穴住居10、段状遺構２～６、土坑３～５
（1/60）…… 29・30
図26　竪穴住居10出土遺物（1/4）…… 31
図27　段状遺構４出土遺物（1/1）…… 32
図28　段状遺構４出土遺物（1/4・1/6）…… 33
図29　段状遺構４周辺出土遺物（1/4）…… 33
図30　段状遺構５出土遺物（1/4）…… 33
図31　溝９、段状遺構７（1/60）…… 35
図32　溝10～14（1/60）、溝10出土遺物（1/4）…… 35
図33　竪穴住居11、溝15・16、段状遺構８～13
（1/60）…… 37・38
図34　段状遺構８出土遺物（1/4）…… 39
図35　段状遺構８・９周辺出土遺物（1/4）…… 39
図36　段状遺構11出土遺物（1/4）…… 40
図37　段状遺構13出土遺物（1/4）…… 40
図38　柱穴列４（1/60）…… 41
図39　竪穴住居12・13、溝17・18（1/60）…… 43・44
図40　竪穴住居12・13出土遺物（1/4）…… 45
図41　竪穴住居12・13周辺出土遺物（1/4）…… 45
図42　溝18出土遺物（1/4）…… 45
図43　段状遺構14（1/60）・出土遺物（1/4）…… 46
図44　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 47
図45　段状遺構15・16（1/60）…… 47
図46　段状遺構15出土遺物（1/4）…… 48
図47　段状遺構16出土遺物（1/4）…… 48
図48　段状遺構15・16周辺出土遺物（1/3・1/4）…… 49
図49　竪穴住居14・15、溝19（1/60）、竪穴住居14出土
遺物（1/4）…… 49
図50　包含層等出土の遺物（１）（1/4）…… 51
図51　包含層等出土の遺物（２）（1/4）…… 52
図52　包含層等出土の遺物（３）（1/4）…… 52
図53　包含層等出土の遺物（４）（1/2・1/3）…… 52
図54　時期別遺構図（1/1,000）…… 54
図55　山の間遺跡の変遷と周辺遺跡との関係 …… 56

巻頭図版目次

巻頭図版１　山の間遺跡（下段）遺構検出状況（南西から）
巻頭図版２　１ 竪穴住居２カマド（南東から）
巻頭図版２　２ 竪穴住居８カマド（南東から）
３ 竪穴住居10カマド（南東から）

図版目次

図版１　１ 調査前風景（東から）
２ 調査区下段遺構検出状況（東から）
図版２　１ 調査区上段遺構検出状況（南から）
２ 調査区下段遺構検出状況（南から）
図版３　１ 竪穴住居１（南東から）
２ 竪穴住居２、溝２・３、段状遺構１（南から）
３ 竪穴住居３（南から）
図版４　１ 竪穴住居３カマド（南東から）
２ 竪穴住居４（南から）
３ 柱穴列１、溝４（東から）
図版５　１ 竪穴住居５、溝５（南東から）
２ 竪穴住居７、溝６・７、柱穴列３（西から）
３ 竪穴住居８・９、溝７（南から）
図版６　１ 竪穴住居８（南東から）
２ 竪穴住居９（南東から）
３ 竪穴住居10（南東から）
図版７　１ 竪穴住居10カマド内遺物出土状況（南東から）
２ 段状遺構３（南東から）
３ 段状遺構４・５（南東から）
図版８　１ 溝10～14（南東から）
２ 竪穴住居11、段状遺構８、溝15・16（南東から）
３ 段状遺構８遺物出土状況（東から）
図版９　１ 段状遺構９・10（南東から）
２ 段状遺構11～13（南から）
３ 段状遺構13（南東から）
図版10　１ 柱穴列４（南から）
２ 竪穴住居12・13、溝17・18（南東から）
３ 竪穴住居13　木材圧痕？（南東から）
４ 竪穴住居13　骨片出土状況（南東から）
図版11　１ 竪穴住居12・13、溝17・18（南から）
２ 段状遺構14（南東から）
３ 掘立柱建物１（東から）
図版12　１ 段状遺構15・16（南東から）
２ 段状遺構16遺物出土状況（東から）
３ 竪穴住居14・15、溝19（西から）
図版13　１ 竪穴住居１出土土器
２ 竪穴住居２出土土器
３ 段状遺構１出土土器
４ 竪穴住居４出土土器
５ 竪穴住居８出土土器
６ 竪穴住居７出土土器
７ 溝７出土土器
図版14　１ 竪穴住居10出土土器
２ 段状遺構４出土土器
３ 段状遺構８出土土器
４ 段状遺構８・９周辺出土土器
５ 段状遺構11出土土器
図版15　１ 段状遺構13出土土器
２ 竪穴住居12出土土器
３ 段状遺構14出土土器
４ 竪穴住居13出土土器
５ 段状遺構15・16出土土器
６ 段状遺構15・16周辺出土土器
図版16　１ 包含層等出土土器
２ 玉製品
３ 金属製品
４ 石製品
５ 土製品

表 目 次

表１　確認調査区一覧 …… 8
表２　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 11
表３　遺構一覧表 …… 57
表４　遺物観察表 …… 58
表５　遺構名称新旧対照表 …… 65

写真目次

写真１　発掘調査風景 …… 9
写真２　現地公開の様子 …… 9

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

赤磐市は、平成17年３月７日に旧赤磐郡の山陽町、赤坂町、熊山町、吉井町の４町が合併して誕生した新しい市であり、総面積は209.36km^{2}を有する。岡山県南東の内陸部に位置する赤磐市は、県南に広がる広義での岡山平野の北東側にあたり、北から続く吉備高原の丘陵地を含み広がる、南北に細長い市域を有する。市域の東端には、県の三大河川のひとつである吉井川が南流し、西側には同じく旭川が市域に近接して南流する。市の北部から東部にかけては山地や丘陵地が広がり、市の中央部から南部の平野には、その中心を流れる砂川を軸として田園地帯が広がっている。砂川は、大字仁堀西の山地に源を発して花崗岩の丘陵地を通り、中流域にあたる大字町苅田から立川にかけて沖積平野を形成し、さらに平野南端の船廻りと呼ばれる山峡を通じて岡山市東区瀬戸町に注いでいる。この砂川中流域平野の規模は、東西約5.5km、南北約6.3kmを測る。海抜は11～25mで、標高200～300mの山々に囲まれており、東側の丘陵は比較的低い。遺跡の多くは、この低平な沖積平野もしくは平野に面した丘陵の先端や斜面に形成されている。山の間遺跡は、この平野の南端にあたる大字長尾に所在し、他の遺跡同様、平野に面した丘陵の斜面に立地している。

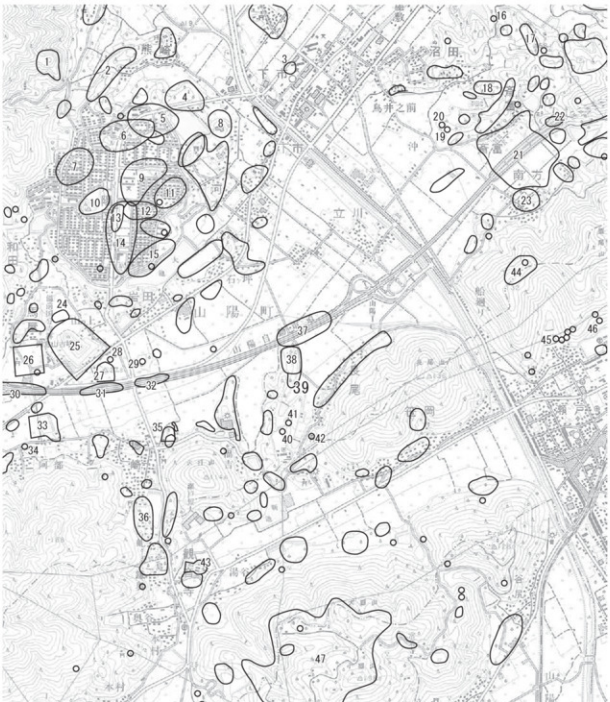
図１　遺跡位置図（1/2,000,000）

第２節　歴史的環境

山の間遺跡周辺の歴史的環境については、隣接して調査された着銅遺跡の発掘調査報告書に記載されているため、本書では、山の間遺跡が営まれた弥生時代から古代にかけての歴史的環境について、近年の調査成果等を踏まえて補足的に概説する。

山の間遺跡の所在する砂川中流域の沖積平野では、南方前池遺跡（23）など平野をのぞむ丘陵上で縄文時代後晩期の遺構や遺物が確認されているが、弥生時代前期になると山陽小学校遺跡（３）から土器が出土しており、人々の沖積平野への進出を物語る。現在、砂川中流域の平野部における弥生時代の遺跡の動向については調査事例が少なく詳しい状況は不明であるが、丸田遺跡では西山高陽条里として周知されている条里の下層で砂川から配される土砂堆積によって形成された自然堤防上に弥生時代の遺構が確認されている。

山の間遺跡が所在する長尾地区やその周辺の立川、斎富、南方地区における遺跡の分布状況については、山陽自動車道建設に伴い試掘確認調査が実施されているため、これでその概要を把握すること



1 善応寺城跡
2 熊崎古墳群
3 山陽小学校遺跡
4 向遺跡
5 門前池西方遺跡
6 便木山方形台状墓
便木山遺跡
便木山古墳群
7 四辻峠方形台状墓
四辻土壙墓遺跡
四辻古墳群
8 門前池東方遺跡
9 用木古墳群
10 野山古墳群
11 愛宕山土壙墓群
愛宕山古墳群
12 用木山遺跡
13 惣図遺跡
14 岩田古墳群
15 岩田大池遺跡
16 別所窯跡
17 別所古墳群
18 沼田城跡
19 雨壺１号墳
20 雨壺２号墳
21 斎富遺跡
22 斎富古墳群
23 南方前池遺跡
24 和田茶臼山古墳
25 両宮山古墳
26 備前国分寺跡
27 森山古墳
28 正免東古墳
29 廻り山古墳
30 馬屋遺跡
31 池新田遺跡
32 新屋敷遺跡
33 備前国分尼寺跡
34 朱千駄古墳
35 小山古墳
36 亀遺跡
37 長尾遺跡
38 着鋼遺跡
39 山の間遺跡
40 山の間１号墳
41 山の間２号墳
42 道通山古墳
43 玉井丸山古墳
44 竜王古墳群
45 西久保紙園古墳群
46 西久保１号墳
47 大廻小廻山城跡

図２　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）

ができる。山の間遺跡（39）や着鋼遺跡（38）が存在する南から北にのびる尾根先端の東西に広がる平野部は長尾遺跡（37）として周知されているが、試掘調査の結果、主にかつての旧河道または低湿地であったことが判明している。また、砂川東岸の南方地区においても、条里遺構として調査を実施しているが、遺構や遺物は確認されていない。このように、この地域に広がる平野部の大部分は砂川の支流あるいは低湿地であり、集落が形成できるような安定した微高地は少なかった可能性が高い。

その一方で、これらの平野を取り囲む丘陵には多くの弥生時代の集落や墓域が形成されている。中でも、現在山陽団地となっている同丘陵に営まれた中期後半の用木山（12）、惣図（13）、門前池（５・８）等の集落遺跡群は卓越した遺構密度と遺物量から当地域の拠点集落のひとつと考えられる。墳墓については、東高月丘陵に築かれた中期の四辻峠方形台状墓（７）と四辻土壙墓遺跡（７）、後期の便木山遺跡（６）、愛宕山土壙墓群（11）がある。このうち便木山遺跡では、木棺墓群の中に築かれた特殊器台・壺を伴う小規模な弥生墳丘墓が見つかっている。

他方、東高月丘陵から自動車道を挟んで南に位置する火打山や長尾山といった丘陵の北側斜面においては調査事例が少ないこともあって、弥生時代集落や墳墓等は良く分かっていない。しかし、山の間遺跡では大正年間に蛤刃石斧が採集されたとする伝聞に加え、本書中にも示しているように数多くの弥生土器が出土していることから、山の間遺跡付近の丘陵上にも多数の弥生集落が存在していたと考えられる。

古墳時代になると、東高月丘陵で用木古墳群（９）などの前期古墳が形成されるが、この地域においてはなんといっても中期の両宮山古墳築造を契機に開始される造墓活動が注目される。

両宮山古墳（25）は、墳長206mを測る巨大な前方後円墳であり、その規模は県内では造山古墳（岡山市）、作山古墳（総社市）に次ぐ３番目である。さらに、両宮山古墳は二重の周濠を有していることが判明しており、その二重周濠を含む総長は349mにも達する。その両宮山古墳であるが、近年、墳丘を囲む濠の波浪により浸食をうけていて、その対策が必要となっている。そのため、その対策を検討するための基礎資料を得る目的で、墳丘部分の発掘調査が平成25年度から実施されている。調査内容は現在報告書を作成している段階であるため詳述できないが、前方部を中心に墳丘端部を把握することができたほか、墳丘の盛土の状況を詳細に観察することができた。しかし、本来古墳に見られるはずの埴輪や葺石といった外表施設が発見されておらず、両宮山古墳には当初からこれらの施設が設けられていない可能性が非常に高くなった。これは、両宮山古墳の歴史的意義を考える上での重要な知見といえる。

両宮山古墳には、その周辺に同じく二重周濠を有する和田茶臼山古墳（24）が北側に、正免東古墳（28）、森山古墳（27）が南側に築造されている。後続して中期末から後期初頭にかけては朱千駄古墳（34）、小山古墳（35）が、後期前半には廻り山古墳（29）が築かれている。また、地域的には少し離れるが、砂川中流域北部においても前方後円墳と考えられる二塚１号墳や鳥取上高塚古墳などの首長系譜が確認されている。このように、当地域には備前地域でも有数の古墳が継続して築造されていることから、この地が備前地域における政治的な拠点のひとつとして機能していたことがうかがえる。

これらの古墳群が営まれた古墳時代中期から後期の集落遺跡として、東高月丘陵の門前池遺跡（５・８）や、山の間遺跡に隣接する着鋼遺跡（38）、砂川東岸に位置する斎富遺跡（21）があるが、古墳の隆盛に比しその調査事例は多いとはいえない。斎富遺跡は、丘陵の裾部から広がる扇状地状の平野に位置する集落跡で、陶質土器や軟質系土器など朝鮮半島系遺物が出土し、朝鮮半島からの人の移動

や移住が想定される。また、門前池東方遺跡（８）ではオンドルなど、その起源が朝鮮半島に由来する遺構が発見されている。このように、これらの古墳群が築造された時期の人々の交流は広範であったことが分かる。

古墳時代後期に入ると古墳に横穴式石室が導入されるが、近畿地方の導入時期に比べるとその採用は遅れるようである。赤磐市域における初期の横穴式石室として八塚３号墳があげられるが、斎富２号墳（22）は同一の墳丘から竪穴式石室と横穴式石室が検出されており、竪穴式石室から横穴式石室への移行期の古墳として注目されている。当地域での横穴式石室では鳥取上高塚古墳や牟佐大塚古墳など巨大な石室をもつ横穴式石室が知られるほか、岩田14号墳では石室内から装飾大刀など豊富な副葬品が出土している。

古代になると、山の間遺跡からおよそ２km 南に位置する独立山塊に大廻小廻山城（47）が築かれる。いわゆる古代山城のひとつとして７世紀に築造された山城と考えられる。城壁を約3.2km めぐらし、その内側の面積は約38.6haを測る。県内で同様の古代山城である鬼城山よりも規模としては大きいが、城壁の一部や木戸と呼ばれる水門の一部が調査されているのみで、全体像の解明には至っていない。

奈良時代には、両宮山古墳の西側に隣接して備前国分寺（26）、その南側に備前国分尼寺（33）が造営される。この両寺の間、両宮山古墳の南側を古代山陽道が東西方向に通じていた可能性が高く、両宮山古墳の西側1.1kmには高月駅家推定地が所在し、古代備前国の陸路として枢要の地であったことが分かる。なお、山の間遺跡の西側に近接する火打山と先述した大廻小廻山城跡の間の東西に広がる山あいに原初古代山陽道あるいは国府へ至る支路を想定する意見もある。

このように、山の間遺跡が存在する長尾地区は、弥生時代から古代にかけて歴史的に重要な地域であったことが分かる。特に赤磐市内でも調査事例の少なかった古墳時代の集落跡が広範に検出され、この地を支配した有力首長層を支えた集落の一端が明らかになったことは貴重な成果といえよう。

引用・参考文献

赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』1940
有賀祐史ほか『備前国分寺跡２』赤磐市文化財調査報告第５集　岡山県赤磐市教育委員会　2011
有賀祐史ほか『向山宮岡遺跡 丸田遺跡 中尾遺跡の大量出土銭』赤磐市文化財調査報告第６集　岡山県赤磐市教育委員会　2013
有賀祐史ほか『備前国分寺跡３』赤磐市文化財調査報告第８集　岡山県赤磐市教育委員会　2015
伊藤晃ほか『松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99　岡山県教育委員会　1995
宇垣匡雅『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第２集　岡山県山陽町教育委員会　2004
宇垣匡雅『両宮山古墳』赤磐市文化財調査報告第１集　岡山県赤磐市教育委員会　2005
宇垣匡雅ほか『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告第３集　岡山県赤磐市教育委員会　2009
枝川陽ほか『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告９　岡山県教育委員会　1975
尾上元規ほか『八塚古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告218　岡山県教育委員会　2009
神原英朗『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』１～４・６　山陽町教育委員会　1971～1977
山陽町『山陽町史』　山陽町史編集委員会　1986
下澤公明ほか『斎富遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105　岡山県教育委員会　1996
高田恭一郎ほか『着鍋遺跡』赤磐市文化財調査報告第７集　岡山県赤磐市教育委員会　2014
出宮徳尚ほか『大廻小廻山城跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1989
中村太一『日本古代国家と計画道路』　吉川弘文館　1996
則武忠直・岡秀昭・塩見真康『岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料』『古文化談叢』32　九州古文化研究会　1994

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

１　発掘調査の契機

赤磐市は、「あかいわ山陽総合流通センター地区計画」を策定し、長尾・立川地内の開発を進めている。これは、交通の利便性に恵まれた立地条件を備える山陽自動車道の山陽インターチェンジに隣接する当地区において、赤磐市の中核流通業務拠点を形成し、グローバル社会にも対応可能な産業基盤の構築を図ることを目的とするものであり、その区域面積は約38haにも及ぶ。

赤磐市教育委員会では、このセンター地区内における埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、関係部局及び事業者と協議を重ねており、平成24年度にはやむを得ず保存ができなかった着銅遺跡の発掘調査を行った。

平成25年８月に当該流通センター事業地内のうちの区画④において、近い将来流通関係企業の誘致が見込まれるため、埋蔵文化財の取り扱いに関する照会文書が市長部局から提出された。この区画④には、周知の埋蔵文化財包蔵地である山の間遺跡が含まれており、隣接して調査された着銅遺跡に連なる古墳時代の集落が広がっている可能性が高いことから、赤磐市教育委員会では遺跡の広がりを確認するための確認調査を実施することとなった。

２　確認調査

事業対象地は北東にのびる尾根の南東斜面に位置する。道路を挟んで約100m南にも同じく北東にのびる尾根があり、事業対象地はちょうど両尾根に挟まれた谷間に位置している。その谷の奥には山間池と呼ばれる溜池が存在しており、下流に広がる水田を潤している。確認調査は、この２つの尾根に挟まれた谷間の北側に位置する丘陵緩斜面上における遺跡の広がりとその残存状況を確認する目的で、平成25年11月18日から12月５日までの間実施した。

調査対象地となっている丘陵の下方は主に水田として、上方は主に畑や果樹園として利用されていた。そのため、斜面は段丘状に造成されており、本来の地形はかなり改変されていることが想定された。確認調査では、周知の埋蔵文化財包蔵地である山の間遺跡や発掘調査が行われた着銅遺跡の状況及び現地形を考慮し、８か所のトレンチを設定して開始したが、調査の過程でさらに遺跡の範囲を正確に把握する必要からトレンチ３か所を追加した。

調査の結果、山の間遺跡は後世の水田や畑・果樹園などの造成によって大きく改変されてはいるものの、着銅遺跡と同様に丘陵の南東斜面部に遺構が広がっていることが判明した。遺構が確認されたトレンチは事業対象地北側のＴ５、Ｔ８、Ｔ10であり、その他の区域では明確な遺構は検出されなかった（表１）。

Ｔ５ではトレンチ内の北西半部の地山は造成により削平されていたが、下位では緩やかな斜面が残

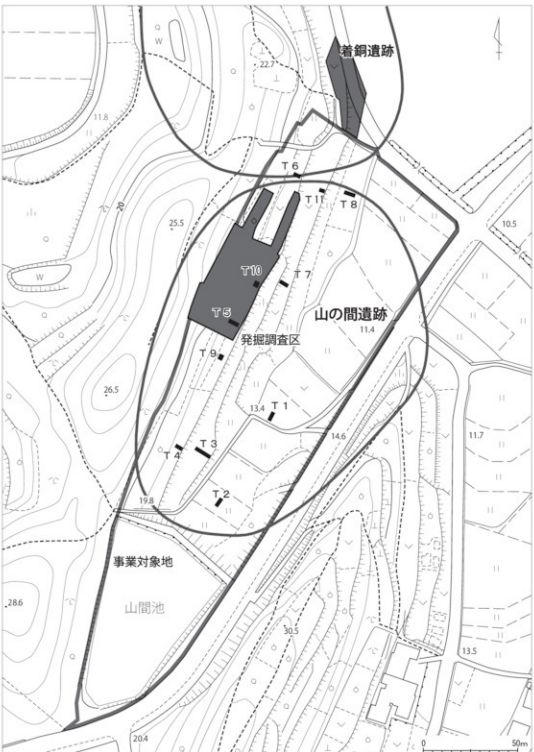


図３　調査区位置図（1/2,000）

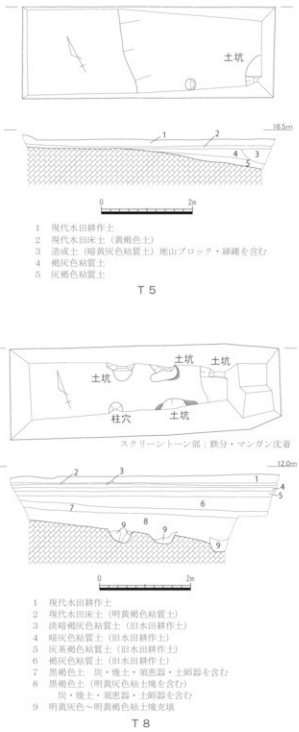


図４　トレンチ平・断面図（1/80）・出土遺物（1/3・1/4）

存しており、そこから古墳時代と考えられる土坑を検出した。土坑からは５世紀後半から６世紀のものと思われる須恵器が出土した。Ｔ８は斜面の下方に位置するトレンチであるが、地山上面に堆積している炭や焼土を含む黒褐色土（図４　Ｔ８　７・８層）を中心にまとまった遺物が出土した。２は須恵器長頸壺の体部である。４は土師器高杯で、５は土師器杯である。６は高台付の土師器椀で外面

表１　確認調査区一覧

調査区	調査規模（m）	調査面積（㎡）	田面高（m）	遺構			遺物			備考
				種類	検出面海抜高（m）	時期	種別	量(注)		
Ｔ１	5×2	10	12.38	－	－	－	須恵器・土師器・磁器	△		
Ｔ２	5×2	10	13.80	－	－	－	－	－		
Ｔ３	9×2	18	14.80	－	－	－	須恵器・土師器	△		
Ｔ４	4×2	8	16.80	－	－	－	土師器	△		
Ｔ５	5.5×2	11	16.30	土坑・柱穴	15.91	古墳	土師器・須恵器	○		発掘調査
Ｔ６	4×2	8	15.95	－	－	－	－	－		
Ｔ７	5×2	10	13.28	－	－	－	土師器・須恵器・磁器	○		
Ｔ８	6×2	12	11.83	土坑・柱穴	10.68	古代以前	弥生土器・土師器・須恵器	◎		
Ｔ９	2.5×3	7.5	16.29	－	－	－	弥生土器・土師器・須恵器・備前焼？	○		
Ｔ10	2.5×3	7.5	16.35	段状遺構	15.92	古墳	土師器・須恵器・備前焼	◎		発掘調査
Ｔ11	3×2	6	13.31	－	－	－	土師器・須恵器	○		

（注）遺物量　△：数点、○：１袋程度、◎：１袋一杯

に丹が塗布されている。Ｍ１は鉄器で、２片に分かれているが同一個体と考えられる。器種は不明である。これらの遺物は古墳時代から平安時代のものであるから、この黒褐色土は古代以後に堆積したと考えられる。調査ではこの黒褐色土の下で地山を検出し、柱穴１基と土坑４基を確認した。土坑には明黄灰色あるいは明黄褐色の粘土塊が充填されていた。遺構に伴う遺物がほとんどなく、詳細な時期は不明であるが、黒褐色土の下位にあるので古代以前と考えられる。Ｔ10はＴ５で見られた遺構の広がりを確認するために設定したトレンチであり、古墳時代に属すると考えられる遺構を確認した。これは、発掘調査で検出した段状遺構15に相当するものである。１・３はＴ10上面の造成土中から出土した土器である。１は須恵器杯身、３は土師器甕である。これらの状況から、遺跡は北隣に位置する着鍋遺跡から斜面沿いに南に向かって広がっているものと考えられた。

一方、谷底に位置するＴ１・２では遺構は認められていない。また、Ｔ３・４を設定した斜面においても遺構は検出されておらず、後世の改変が大きいと考えられる。事業予定地北部のＴ６・11でも表土から浅いところで地山が確認され、後世の造成による削平がかなり及んでいると想定された。また、Ｔ９においても明確な遺構は見られず、この付近も後世による造成の影響が大きいと考えられる。ただし、Ｔ10の下段に位置するＴ７は、遺構は確認できなかったものの、遺物がある程度出土することから、Ｔ８のように遺構が残存している可能性も否定できない状況であった。

これらの調査結果から、事業予定地内で遺構を検出した斜面上方のＴ５・10周辺及び斜面下方のＴ８周辺については、工事の際、何らかの保存措置を講ずる必要があるとの結論に至った。

３　発掘調査の経過

平成26年４月にあかいわ山陽総合流通センター区画④における事業計画が岡山ダイハツ販売株式会社（以下、事業者）から打診された。事業計画は山の開遺跡の存在する丘陵斜面上部を掘削し、そこで発生した土砂で谷を埋め立て平坦な事業地を造成するというものであり、開発予定面積は約21,000㎡に及ぶものであった。赤磐市教育委員会では、岡山県教育委員会と協議の上、平成25年度に実施した確認調査の成果をふまえ、遺構が残存していると考えられる事業地北側において、保存することが不可能な区域については記録保存を目的とした発掘調査が必要であるとの見解を示した。

平成26年10月16日に設計のための事前調査としてボーリング地質調査に起因する「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、引き続いて平成26年10月31日に事業者から物流センター施設用地造成のため文化財保護法第93条に基づく届出が提出された。赤磐市教育委員会では、事業者から提出された設計図面と確認調査で得られた情報とを照合し、遺構に影響が及ぶ切土部分については発掘調査による記録保存が必要であるとの意見を付して岡山県教育委員会に文書を進達した。その後、岡山県教育委員会教育長から工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知がなされ、これを受け赤磐市教育委員会では、平成27年２月19日に事業者と文化財保護に関する覚書を締結し、平成27年４月から発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査は平成27年４月２日から６月17日の２か月半の期間で、担当職員３名で実施した。調査区は南東向きの緩斜面で上下２段に造成されている畑地に該当する。調査は排土搬出の都合上、下段から開始し、現代耕作土及び造成土を重機で除去した後に、遺構検出面まで人力で掘り下げた（写真１）。調査区は各段とも、特に山側は造成による切り下げの影響で遺構の残存状況は悪かったが、谷側は逆に上方からの堆積土により保護され保存状況が良好であった。調査対象地は当初は1,380㎡であったが、調査区外まで遺構の広がりが認められたことから調査区を拡張した。図３の調査区で、ちょうど２本の角のように突出した調査区が拡張区である。そのため、最終的な調査面積は1,850㎡となった。現地の遺構は当初の予想より多く、また、保存状態の良好な遺構もあり調査に労力を要したが、最新の自動追尾型のトータルステーションの導入を図るなど効率的な調査に努めるとともに、土曜日も作業を行ったこともあり、当初の予定期間内に終了することができた。

調査の結果、山の間遺跡は竪穴住居、段状遺構などを含む古墳時代の集落跡であることが分かり、特に、竪穴住居に付属しているカマドには保存状態の良いものが見られた。出土した遺物は須恵器や土師器を中心とするもので、コンテナ箱計26箱を数えた。中には臼玉など希少な遺物も見られた。集落が営まれた時期は古墳時代中期から後期で、ちょうど赤磐市に両宮山古墳が出現し、後継の首長墓が相次いで築造される時期に相当する。これまで、当該期の集落跡は斎富遺跡などがあるが全体としては少なく、今回の調査で貴重な集落調査の事例が加わったことになる。

発掘調査については、５月21日に赤磐市文化財保護委員会の視察を受け、調査に関して助言を得た。また、調査成果は広く新聞やテレビ等にも報道され、５月22日には事業者の協力のもと地元区民や市民、一般向けに調査現場を公開することができた。半日の開催でしかも平日であったが、参加者は約150名にも及び、市民の関心の高さをうかがうことができた（写真２）。

写真１　発掘調査風景

写真２　現地公開の様子

第２節　報告書作成の経過

報告書作成は発掘調査終了後、引き続いて開始した。遺物整理として、まず事務所に持ち帰った土器等の洗浄を行った。なお、滑石製臼玉が出土していた段状遺構４の埋土は現地で採取して持ち帰っていたので水洗し、現場では採集することのできなかった臼玉を回収した。洗浄後は遺物の注記を行った後に接合作業に入った。鉄製品は錆落としを含む保存処理を専門業者に委託した。遺物の整理が終了した後に実測のための抽出を行った。実測終了後は、浄写作業及び写真撮影を実施した。本書に掲載している遺物は、確認調査出土時の遺物も含め土器175点、石製品２点、土製品３点、金属製品３点、玉製品７点である。

遺構図面整理は、実測図での検討を行った上で下図を作成して浄写した。掲載遺構は竪穴住居15軒、掘立柱建物１棟、段状遺構16基、土坑５基、溝19条、柱穴列４基である。その後、これらをもとに全体の割付や原稿作成、編集作業を行った。

報告書入稿後は、報告書に掲載された内容にもとづき整理を行った。遺構図面や写真、出土遺物は赤磐市山陽郷土資料館に保管している。

第３節　日誌抄

（確認調査）

平成25年度

11月18日（月）確認調査開始
12月 5日（木）確認調査終了

（発掘調査）

平成27年度

４月２日（木）重機掘削開始（発掘調査開始）
４月３日（金）雇入時安全衛生講習
４月25日（土）下段調査区拡張
５月15日（金）下段調査区全景写真撮影
５月16日（土）上段調査区調査開始
５月20日（水）段状遺構４臼玉出土
５月21日（木）文化財保護委員会現地視察
５月22日（金）現地公開（見学者150名）
５月23日（土）下段調査区調査終了
６月10日（水）上段調査区全景写真撮影
６月17日（水）上段調査区調査終了（調査終了）

（報告書作成）

７月１日（水）整理作業（遺物洗浄）開始
８月20日（木）遺物洗浄作業終了
11月26日（木）遺物接合作業終了
11月27日（金）実測開始
３月31日（木）整理作業終了（H27年度分）

平成28年度

４月１日（金）報告書作成開始
６月２日（木）実測終了
７月20日（水）遺物写真撮影開始
10月20日（木）原稿入稿
２月28日（火）報告書発行

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制

平成25年度
赤磐市教育委員会
教育長　永島　英夫
教育次長　宮岡　秀樹
〈社会教育課〉
課長　正好　尚昭
副参事（文化財班長）高田恭一郎（確認調査）
主任　有賀　祐史（確認調査）
嘱託　畑地ひとみ（確認調査）

平成27年度
赤磐市教育委員会
教育長　杉山　高志
教育次長　奥田　智明
〈社会教育課〉
課長　前田　正之
主幹（文化財班長）金田　善敬（本調査）
主査　有賀　祐史（本調査）
嘱託　畑地ひとみ（本調査）

平成28年度
赤磐市教育委員会
教育長　杉山　高志
教育次長　奥田　智明
〈社会教育課〉
課長　土井　道夫
副参事（文化財班長）金田　善敬（報告書）
主査　有賀　祐史（報告書）
嘱託　畑地ひとみ（報告書）

表２　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積 ㎡	原因	遺跡の 有無	報告者	担当者	期間
赤教社 第691号 H25.12.19	周知	集落跡 山の間遺跡	赤磐市長尾332ほか	108	その他開発 （流通センター）	有	赤磐市教育委員会 教育長　永島英夫	高田恭一郎 有賀祐史 畑地ひとみ	H25.11.18～ H25.12.5

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

岡山県文書 番号　日付	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積 ㎡	目的	届出者	期間	主な指導事項
教文理 第920号 H26.10.28	集落跡 山の間遺跡	赤磐市長尾473ほか	0.03	その他開発 （地質調査）	事業者	H26.11.15～ H26.11.30	慎重工事
教文理 第976号 H26.11.10	集落跡 山の間遺跡	赤磐市長尾302ほか	21,000	その他開発 （物流センター施設用地造成）	事業者	H27.2.1～ H27.11.30	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積 ㎡	原因	報告者	担当者	期間
赤教社 第27号 H27.4.7	集落跡 山の間遺跡	赤磐市長尾310ほか	1,380	工場	赤磐市教育委員会 教育長　杉山高志	金田善敬 有賀祐史 畑地ひとみ	H27.4.2～ H27.7.31

遺物発見通知・文化財認定（法第100条・第102条）

岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第1120号 H25.12.27	土師器、須恵器ほか 計整理箱１箱	赤磐市長尾332ほか （山の間遺跡）	H25.11.18～ H25.12.5	赤磐市教育委員会 教育長　永島英夫	個人	赤磐市山陽 郷土資料館
教文理 第321号 H27.7.6	弥生土器、土師器、須恵器、 石製品（石鏃・玉）ほか 計整理箱26箱	赤磐市長尾310ほか （山の間遺跡）	H27.4.2～ H27.6.17	赤磐市教育委員会 教育長　杉山高志	事業者・個人	赤磐市山陽 郷土資料館

第３章　発掘調査の概要

第１節　調査の概要

調査地は、南東向きの緩斜面で標高14～20mの範囲に位置している。調査着手前の地形は２段の畑地で、上下の畑地の標高差は約４mであった。調査によって判明した地山や遺構の残存状況から旧地形を復元したものが図５であるが、この図から畑地は山側の地山を切り崩し、谷側を埋めていくことで造成され、特に下段の造成規模が大きいことが分かる。そのため、下段から上段にかけての地山の掘削が深く及んでいる箇所では遺構は検出されず、遺構全体図（図６）に見られるように、結果的に調査区の中央部分が遺構の空白地帯となっている。反対に、畑地の谷側では遺構の残存状況が良好で、竪穴住居や段状遺構などの遺構が多く検出された。

なお、調査区における遺構の広がりであるが、上段では段状遺構７、下段では溝19より南では遺構は検出されなかった。しかし、北側では当初想定していた調査区を越えて遺構が広がったため、上下の各段についてそれぞれ調査区を拡張した。図６の北側にちょうど二本の角のように突き出ている部分がその拡張した調査区である。拡張区は遺構の広がり具合から随時拡張したが、20～30mほど北に延長した付近で遺構が見られなくなったため、それ以上は拡張しなかった。

本書に掲載した遺構は、竪穴住居15軒、掘立柱建物１棟、段状遺構16基、土坑５基、溝19条、柱穴列４基である。出土した遺物には弥生時代のものも含まれるが、遺構の大部分は古墳時代中期から後期にかけてのものである。したがって、古墳時代については集落の動向を詳細に把握する目的で当該時期を１～Ⅳ期に区分して報告する（第４章参照）。

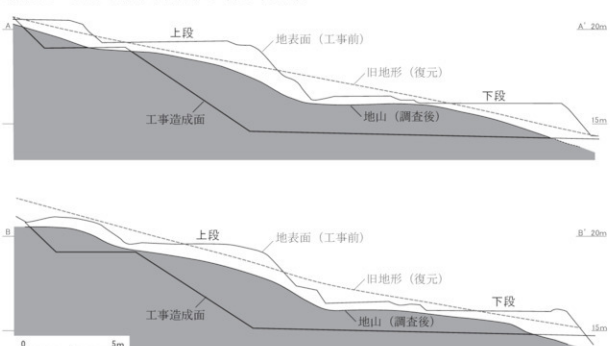


図５　調査区断面図（1/200）

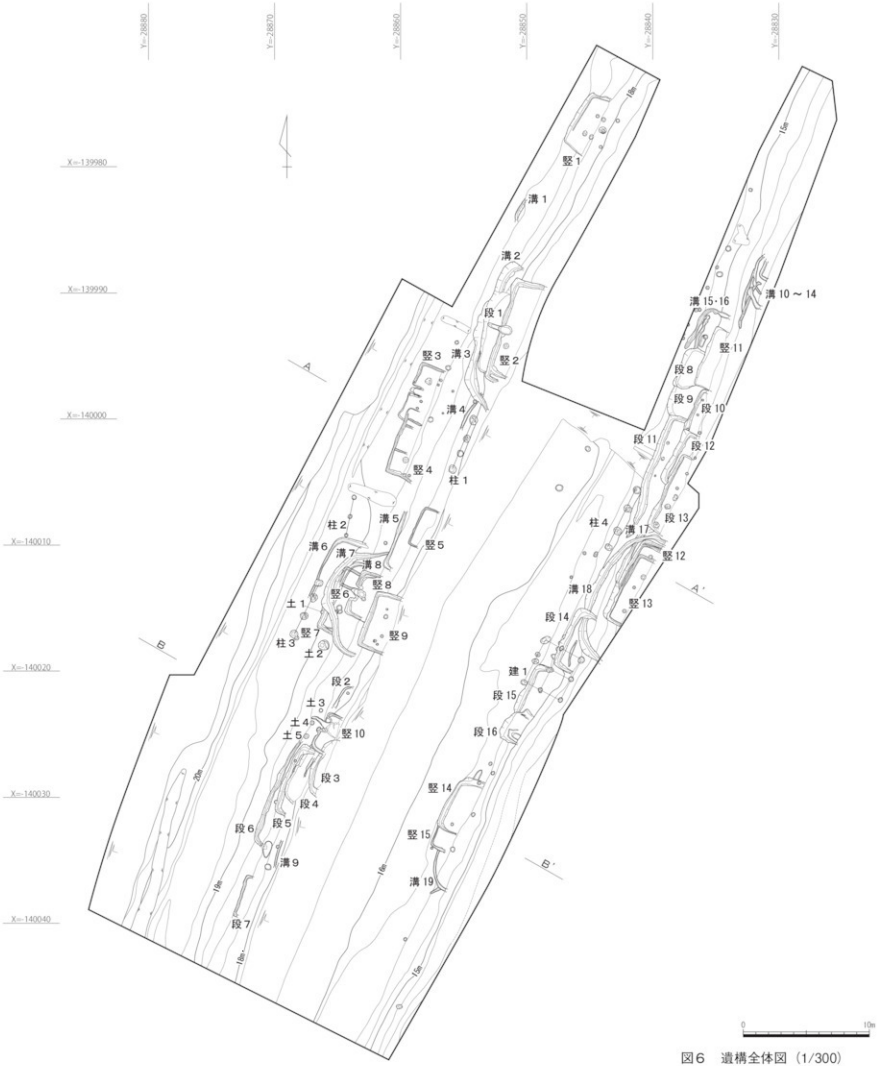


図６　遺構全体図（1/300）

なお、竪穴住居や段状遺構として報告しているものの中には、両者の区別が難しいものがある。本書では基本的に平面が整った方形であったり、主柱穴やカマドなどの設備が確認されたりした遺構を竪穴住居とし、溝のみ、あるいは床面は確認できるものの内部に建物を示す根拠に乏しいような遺構については段状遺構として報告している。

また、本遺跡では竪穴住居の周辺に設けられた外周溝のように複数の遺構が一体となって機能していた状況が見受けられる。そのため、本書ではこのような遺構のまとまりを重視し、調査区上段の北側から順に遺構の説明を行う。

第２節　古墳時代以降の遺構と遺物

竪穴住居１（図７、図版３－１・13－１）

調査区北端に位置し、残存長202cm、幅453cmを測る。下半分の３分の２程度は残存していないが、平面形は下方に向かって開く台形と推測できる。主軸はＮ－60°－Ｗである。北東辺から北西辺にかけて幅50cm、深さ40cmほどの壁体溝を有しているが、北西辺では次第に浅くなり最終的に消滅している。壁体溝に囲まれた範囲で床面が残存しており、その標高は18.3～18.36mを測る。住居内から柱穴６基（Ｐ１～６）と中央穴（Ｐ７）を検出した。柱穴はその特徴からＰ１・２・５・６とＰ３・４に分類できる。前者は底部の標高が17.85m付近とそろっていることや、その配置から住居を支えた主柱穴と考えられる。柱間は、Ｐ１－Ｐ２間で173cm、Ｐ５－Ｐ６間で250cm、Ｐ１－Ｐ５、Ｐ２－Ｐ６間はともに166cmを測る。主柱穴の配置はやや歪んだ台形となっているが、住居の平面形と対応している

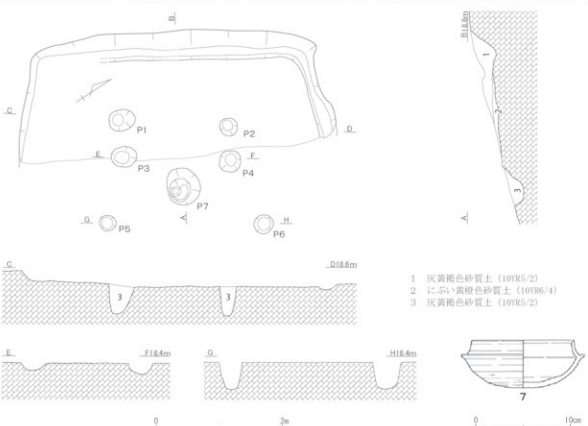


図７　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）

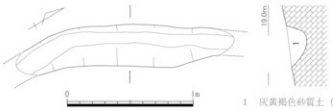


図８　溝１（1/30）

ものと考えられる。Ｐ３とＰ４は柱間174cmを測るが、深さは12～13cm程度と浅いのが特徴である。周辺にこれに対応する柱穴は見当たらないため、Ｐ３・４はＰ１・２・５・６とは別の建物か、あるいはＰ１・２・５・６の柱上の架構材を補助した支柱の穴であった可能性が考えられる。Ｐ７は中央穴と考えられ、径60×56cm、深さ44cmを測る。灰黄褐色土が堆積しているが、被熱の痕跡は認められなかった。

住居からは須恵器、土師器が出土した。**７**は須恵器杯身であり、５世紀後葉から６世紀前葉に比定できるため、この住居はⅡ期に比定できよう。なお、この住居と直接の関係はないが、住居埋土中からまとまった弥生時代後期の土器が出土した。埋没の過程で周辺に残存していた弥生土器が流入したものと考えられる。

溝１（図８）

竪穴住居１の南西の調査区上端に等高線に沿うように掘削されている溝で、残存長174cm、幅33cm、深さ17cmを測る。上方から流入する雨水から住居などを保護するための外周溝の痕跡とも考えられるが、これに対応する住居などの施設が周辺では見つかっていない。出土遺物もなく、時期不明である。

竪穴住居２（図９・10、巻頭図版２－１、図版３－２・13－２）

竪穴住居２は調査区中央から北寄りに位置するカマドを有する住居である。残存長253cm、幅875cmを測り、主軸はＮ－72°－Ｗである。本遺跡中で最大の竪穴住居であるが、全体的に残りが良くなく、床面も壁体溝の周縁にわずかに残存する程度である。竪穴住居２の上面に段状遺構１が存在しており、土層（図９　Ａ－Ｂ土層断面）の観察から竪穴住居２のほうが古いことが分かる。北辺から西辺にかけて幅45cmほどの壁体溝を有し、中央でカマドの燃焼部及び焚口付近の浅い土坑につながっている。住居の南端では壁体溝が２条に分かれているが、カマドが住居南端の外側の壁体溝と北端の壁体溝の中軸上に位置していることから、南端外側の壁体溝がこの住居本来の壁体溝であったと考えることができる。床面はほとんど残存しておらず、調査した範囲からは径45cm程度、深さ13cmの土坑１基のほかに柱穴等は確認できていない。

カマドは燃焼部と焚口及び煙道の一部が残存している。カマドの残存長は203cmで、焚口付近で幅約70cmを測る。煙道は残存長約90cm、煙道幅34cmで、残存している煙道の深さは16cmである。斜面に沿いながら約16度の傾斜で立ち上がっている。焚口と燃焼部は浅いくぼみ状に掘り下げられた後に、にぶい黄橙色土（図９　Ｅ－Ｆ土層断面４層）で埋め戻してからカマドを使用している。カマドの埋土には炭や焼土が多く含まれ、底面の径70cm程度の範囲が被熱により赤色化していた。カマドの袖は明瞭に検出することができなかったが、その理由として、カマドの袖が地山削り出しではなく、付け加えられたものであり住居の埋土と明瞭に区別することができなかったためか、あるいは埋没段階ですでに袖が失われていたためと推測できる。カマドの両側では土器が残存しており、北側の土器**12**は土師器壺の下半部の破片であった。南側の土器**９**は小形の土師器甕であり、口縁部から体部にかけて半分程度が残存していた。これらの土器は袖の外側に廃棄された土器とも考えられるが、位置的に袖に近いことから、カマドの袖の中に埋め込まれていた可能性も残しておきたい。

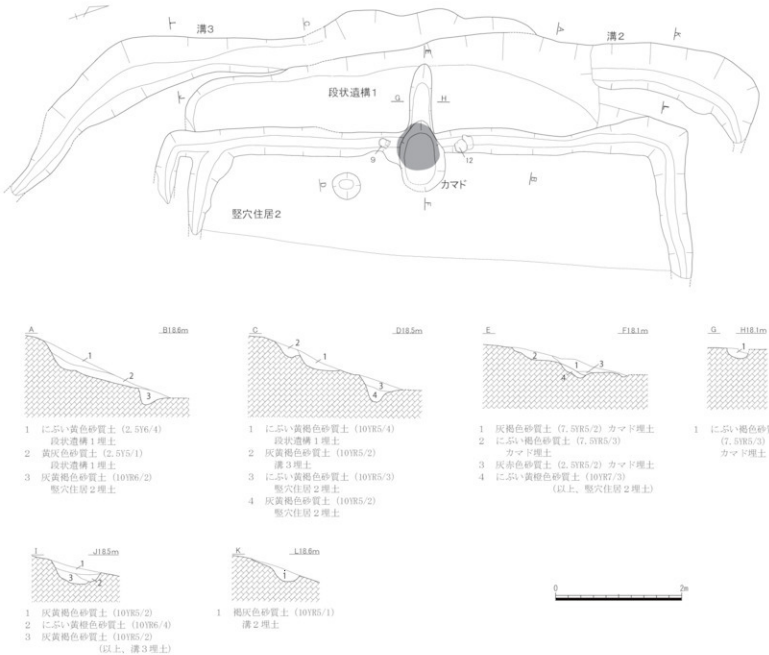


図９　竪穴住居２、溝２・３、段状遺構１（1/60）

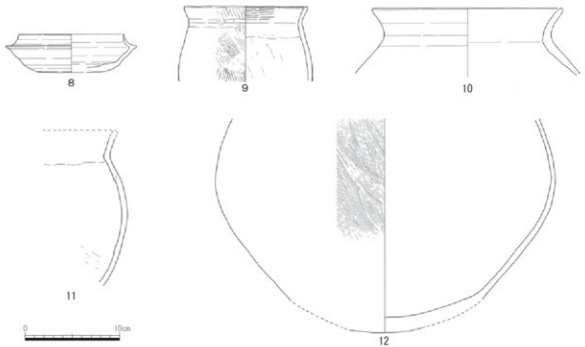


図10　竪穴住居２出土遺物（1/4）

住居からはその他にも須恵器や土師器が出土している。８は須恵器杯身である。10は土師器甕である。11は土師器甕でカマドの南側で土器９とともに出土した。これらの遺物や段状遺構１の遺物などから、この竪穴住居２は６世紀後半頃のⅣ期に営まれたものと考えられる。

溝２（図９・11、図版３－２）

竪穴住居２の上方北側に位置する溝で、残存長274cm、幅78cm、深さ36cmを測る。溝は北に向かうにつれ方向を斜面の下方に曲げている。その形状が竪穴住居２北側の壁体溝を囲うようにめぐっていることから、溝２は溝３と一体で竪穴住居２の外周溝の役割を担っていたものと考えられる。

埋土から須恵器や土師器が出土している。15は土師器甕である。その他にも溝から土器が出土しているがいずれも小片で時期を特定できる遺物は少ない。竪穴住居２や溝３と同時期の遺構と考えられ、Ⅳ期に属するものと推測される。

溝３（図９・11、図版３－２）

段状遺構１の南に位置する。残存長884cm、幅78cm、深さ38cmを測る。溝は南に至るにつれて緩やかに南東に傾斜しており、溝２とともに竪穴住居２の外周溝の役割を果たしていたものと考えられる。土層の観察（図９　C－D土層断面）から、溝３埋没後、埋土の一部を削って段状遺構１が造られたことが分かる。

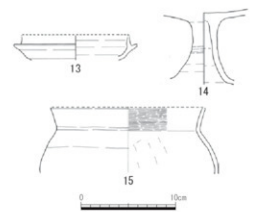


図11　溝２・３、段状遺構１出土遺物（1/4）

溝の埋土から須恵器や土師器が出土している。13は須恵器杯身である。竪穴住居２より新しい時期のものであるが、廃絶後に流入したものと考えられる。竪穴住居２の外周溝としての機能を考慮し、溝３はⅣ期の遺構と判断したい。

段状遺構１（図９・11、図版３－２・13－３）

竪穴住居２の上面に位置する。検出した範囲は長さ約150cm、幅約700cm、深さ84cm を測る。遺構の底面は下方に緩やかに傾斜しているため、底面のレベルは標高17.73～17.95m と高低差がある。遺構内で柱穴などの遺構は検出されておらず、どのように利用されていたのかは不明である。土層断面観察（図９　A－B、C－D土層断面）の結果、竪穴住居２や溝３の廃絶後に営まれたものと考えられる。埋土から須恵器や土師器が出土している。**14**は須恵器長脚高杯の脚柱部であり、７世紀の土器であろう。土器の他に鉄滓が出土しており、周辺で鍛冶が行われていた可能性がある。出土した須恵器の製作年代から段状遺構１は竪穴住居２の廃絶後の７世紀に利用されたものと考えられる。

竪穴住居３（図12、図版３－３・４－１）

調査区北半部で、竪穴住居４とともに最も高い場所にある竪穴住居である。造成や耕作の影響で平面も下半分は削平により失われており、埋土も厚さ10cm 程度を残すのみで残存状況は良くない。後述する竪穴住居４と切り合い関係にあり、竪穴住居３のほうが先行して存在していたことが分かる。

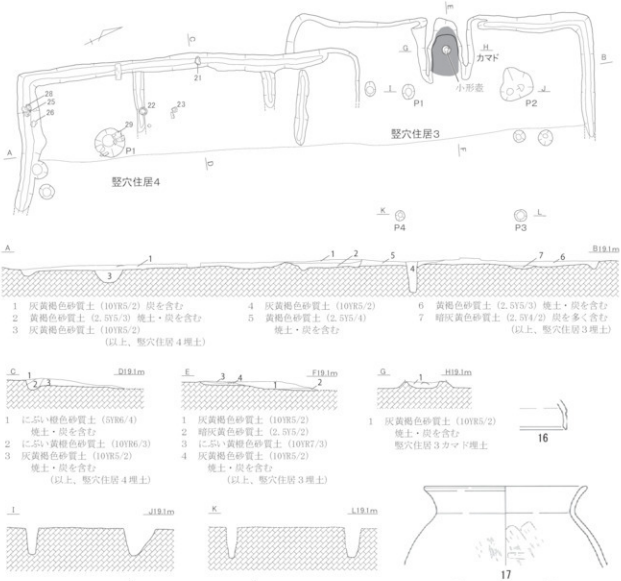


図12　竪穴住居３・４（1/60）、竪穴住居３出土遺物（1/4）

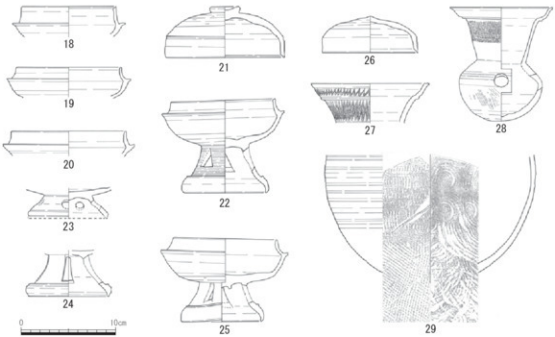


図13　竪穴住居４出土遺物（1/4）

平面形は方形で、残存長207cm、幅489cmを測り、主軸はＮ－68°－Ｗである。床面は標高18.89m付近と推定され、住居の北辺から西辺のカマドまで壁体溝がめぐっている。壁体溝はカマドの南側から不明瞭となるが、南辺は竪穴住居４の床面下で長さ120cmほどが残存している。住居内からは主柱穴と考えられる柱穴が４基（Ｐ１～Ｐ４）検出された。いずれも柱穴底部が標高18.4m付近に収まっていることから、柱の根入れが約49cmであったことが分かる。柱間はＰ１－Ｐ４、Ｐ２－Ｐ３でそれぞれ195cmと197cmと数値が近いのに対し、Ｐ１－Ｐ２は160cm、Ｐ３－Ｐ４は190cmと30cmの差が生じている。

カマドは煙道が欠失していたが、燃焼部を中心に基底部が残っており、残存長102cm、残存幅94cmを測る。カマドの両側には袖が取り付き、中に炭や焼土を含んだ土が埋積していた。底面は熱による影響を受けて変色していた。カマドの中央には土師器の小形壺の底部が図や写真（図12　Ｅ－Ｆ、Ｇ－Ｈ土層断面及び図版４－１）で示したような形状で残存していた。この小形壺は器壁の厚さが３mm程度と薄いもので、小破片となっており復元できなかったことから図示していない。

住居からの出土遺物は少なかったが、須恵器杯蓋16と土師器甕17を図示している。17はカマドから破片で見つかった。竪穴住居４より古いことからⅡ～Ⅲ期の竪穴住居と考えられる。

竪穴住居４（図12・13、図版４－２・13－４）

竪穴住居４は、竪穴住居３の南に位置する住居で、先述したように竪穴住居３を壊して造られている。竪穴住居４は３分の２程度が削平により失われている上に、開墾等の影響で埋土も厚さ10cmほどしか残っていない。検出した住居の規模は残存長210cm、幅561cm、主軸はＮ－70°－Ｗである。埋土に炭化した木材や焼土を多く含んでいることから、焼失住居と考えられた。そのため、調査においては炭化材の位置や配置に十分留意して掘り下げを行ったが、建物の構造材を顕著に示すような部材の検出には至らなかった。しかし、不慮の火事であったためか、床面近くで完形に近い須恵器が多く出土した。床の周囲には壁体溝がめぐらされていたが、北辺では見つからなかった。住居内では床

を仕切るような小溝が２条確認できた。これにより分けられる区画は、南側の区画で幅180cm、中央で208cm、北側で137cm である。住居内からは径47cm、深さ約20cm のピット（Ｐ１）が検出されたが、それ以外に柱穴等は見つかっていない。また、竪穴住居３で見られたようなカマドはこの住居では未検出である。

住居では、残存状況が良くないわりに多くの土器が出土した。18～29はいずれも須恵器である。18～20は杯身であり、21～25は高杯である。22の脚部には三角形、23は円形、24・25は方形の透かしをもつ。26は壺蓋と考えられる。27・28は甕である。29は壺の体部である。壺の内面はタタキにより調整された後、その痕跡をすり消しているが、完全には消しきれていない。住居内からは、その他に土師器小片が若干出土している。これらの遺物から竪穴住居４の時期はⅡ～Ⅲ期で火災に遭い焼失したものと考えられる。

柱穴列１（図14、図版４－３）

竪穴住居２や溝３の南に位置し、溝４が近接して存在する。柱穴列は径50～60cm 程度の柱穴４基で構成され、等高線に沿うように軸をＮ－22°－Ｅに向けている。柱穴の底のレベルは不ぞろいでＰ２の底が標高17.8m と浅く、Ｐ１が標高17.54m と深い。柱間はＰ１－Ｐ２間で140cm、Ｐ２－Ｐ３間で128cm、Ｐ３－Ｐ４間で148cm を測り、中央の１間分がやや狭い間取りとなっている。建物の可能性も想定したが、対応する柱穴が周辺では確認できなかった。

各柱穴から須恵器や土師器が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。出土した須恵器の中にはその特徴から５世紀後葉から６世紀前半頃のⅡ～Ⅲ期のものと想定される破片が含まれていることや、後述する溝４から出土した須恵器の製作時期などから、柱穴列１はⅡ～Ⅲ期に設けられたと考えられる。

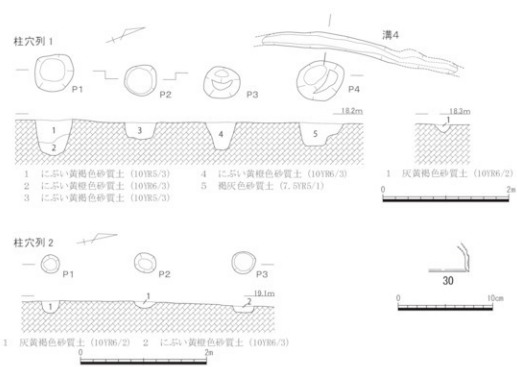


図14　柱穴列１・２、溝４（1/60）、溝４出土遺物（1/4）

溝４（図14、図版４－３）

柱穴列１の北側に近接する溝である。残存長315cm、幅25cm、深さ12cmを測る。残存状況が良くなく、本来の形状は不明であり、柱穴列１との関係も不明である。溝３と切り合っており、溝４が古いと推測できる。溝からは須恵器や土師器が少量出土している。須恵器杯蓋**30**が出土しており、その製作時期から溝４は５世紀後葉から６世紀前半頃のⅡ～Ⅲ期に比定できる。

柱穴列２（図14）

溝６の北側に位置する。軸をＮ－12°－Ｅの方向に向けて３基の柱穴が一直線に並んでいる。いずれも径30～35cmほどで、深さも10～20cm程度しか残っていない。柱間はＰ１－Ｐ２間で152cm、Ｐ２－Ｐ３間で154cmとほぼ等間隔である。出土遺物は見つかっておらず、時期は不明である。

竪穴住居５（図15、図版５－１）

竪穴住居５は竪穴住居４と竪穴住居８・９との間に造られた住居である。斜面を「コ」の字状に掘り下げ、斜面上方の約３分の１が残存している。後述する溝５は、この住居の外周溝と考えられる。残存長131cm、幅336cm、深さ27cmを測り、主軸はＮ－64°－Ｗである。周辺には幅約18cmの壁体溝がめぐっている。床面の高さは18.12～18.15m付近と考えられるが、床面から柱穴などの痕跡は何も検出されていない。

埋土中から須恵器や土師器が少量出土した。**31**は須恵器杯蓋である。この出土遺物の年代から竪穴住居５はⅡ期に営まれた住居と考えられる。

溝５（図15、図版５－１）

竪穴住居５の上方に位置する。検出した長さは477cm、幅26cmを測るが、北側は削平によって失われている。竪穴住居５の北西辺と平行であることから、竪穴住居５の外周溝としての機能が考えられる。南側は直角に折れ曲がっており北側も同様の形状と考えるなら、竪穴住居５の中軸を溝の中心とし長さ約8.4mに復元できる。南側で溝７と切り合いを生じているが、溝５が古いと考えている。溝５からは少量の須恵器や土師器が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。竪穴住居５と一連の遺構と推測できⅡ期に比定できる。

竪穴住居６（図16）

竪穴住居８上部のＬ字状を呈する溝状の遺構である。検出した範囲は164×145cmで、幅20cm、深さ８cm程度の壁体溝と床面がかろうじて残存していた。方形を意識して計画的に設けられていることから、竪穴住居の一部と判断した。主軸はＮ－60°－Ｗを測る。壁体溝の北西辺は溝８の下層（図

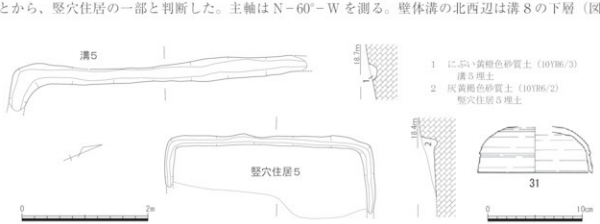
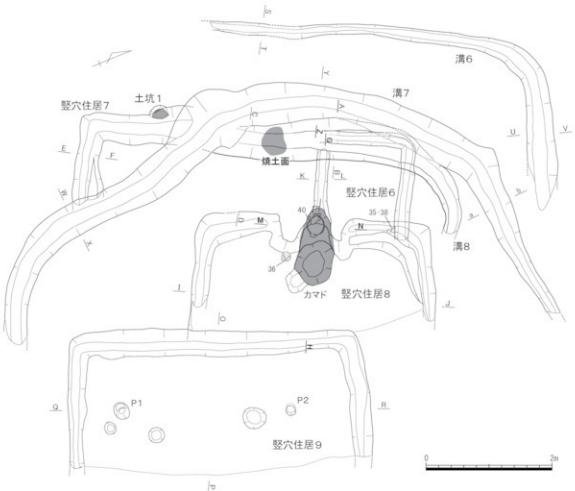


図15　竪穴住居５、溝５（1/60）、竪穴住居５出土遺物（1/4）



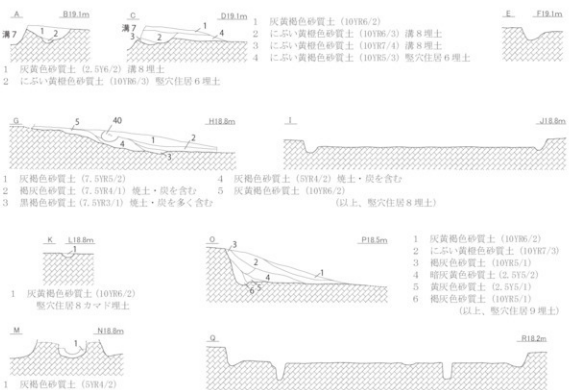


図16　竪穴住居６～９周辺遺構図（1/60）

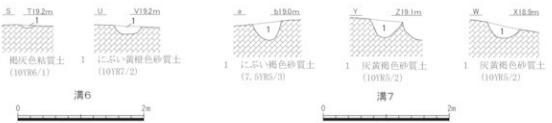


図17　溝６・７断面図（1/60）

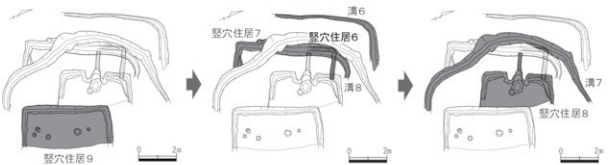


図18　遺構変遷模式図

16　A－B土層断面）にかろうじて残存しているが、これより南側では削平されて消滅している。竪穴住居８と竪穴住居６の壁体溝で囲まれる標高18.73m付近に平坦面が認められ、これが住居の床面と推定できる（図16　C－D土層断面）。周辺に他の遺構が多数存在し、住居自体の残存状況も良くないため、竪穴住居６の範囲や柱穴の有無など住居に関する詳細な情報は得られていない。なお、竪穴住居７と平面的には合致するものの、溝の形状が大きく異なり、同一住居とするには違和感があるため、別の竪穴住居として報告するが、互いに有機的な関係がうかがえる。

出土遺物はなく時期は不明であるが、周辺の遺構との切り合いや、竪穴住居７との関係から５世紀後葉から６世紀前半頃のⅡ～Ⅲ期に営まれたと推測できる。

竪穴住居７（図16・19、図版５－２・13－６）

溝７と切り合い関係をもち、L字状の溝を有する遺構であり、検出した範囲で176×150cm を測る。溝の幅は西辺で50cm 前後、南辺で35cm 程度を測り、通常の竪穴住居の壁体溝よりも大きいが、土層断面（図16　E－F土層断面）に見られるように、溝の外側上端に比べ内側が少し低く、標高18.86m付近で床面をなしていると考えられたため竪穴住居と判断した。この壁体溝は、場所にもよるが深さ10～20cm を測り、切り合いから土坑１より新しく、溝７より古いことが分かる。先述したように壁体溝の形状が通常の住居と比べ大きいが、竪穴住居６と平面プランが似ており、元来は同一の遺構であった可能性も指摘しておきたい。

埋土から須恵器や土師器が出土した。**32**は須恵器杯蓋であり床面埋土から出土した。**34**は須恵器壺であり、壁体溝の上方で出土した。壺内面はタタキによる調整痕跡がナデ消されて不明瞭になっている。**33**はこの住居の周辺

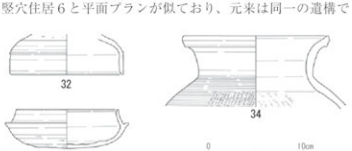


図19　竪穴住居７出土遺物（1/4）

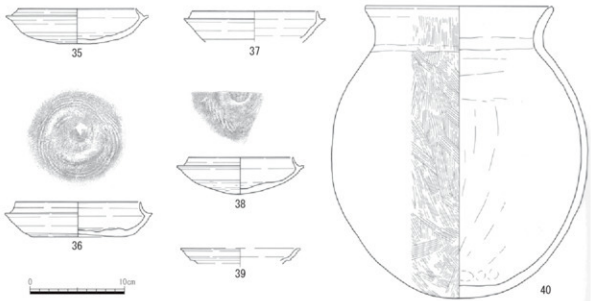


図20　竪穴住居８出土遺物（1/4）

で検出された須恵器杯身であり、この住居に伴う可能性がある。以上の出土遺物や周辺の状況から竪穴住居７は５世紀後葉から６世紀前半頃のⅡ～Ⅲ期に営まれたと推測できる。

竪穴住居８（図16・20、巻頭図版２－２、図版５－３・６－１・13－５）

竪穴住居８は、竪穴住居９の上方に位置する方形の竪穴住居である。下半部が欠失しているが、斜面上方の約３分の１が検出された。残存長191cm、幅392cmを測り、主軸はＮ－65°－Ｗである。住居内の北西辺中央にカマドをもつ。カマドの両側には壁体溝がめぐっている。北側の壁体溝は住居の縁にそってＬ字状にめぐるが、その内側に幅約35cm、高さ5cmほどが土手状に削り残されている。床面は標高約18.45mであるが、柱穴などの遺構は見当たらなかった。

カマドの主軸はＮ－64°－Ｗで、竪穴住居の主軸とほぼ同じである。カマドは煙道や燃焼部、焚口などが比較的良好な状態で残存していた。煙道部は長さ94cm、幅21cm、深さ10cm程度が残存している。燃焼部の長さは79cm、幅61cmを測る。両側に袖が広がり、袖の幅は北側で35cm、南側で48cm、高さは25cmが残存している。燃焼部内では赤色化した被熱面が見られ、炭や焼土を含む土が堆積していた。燃焼部から上部が一部欠損していたが、本来は完形で設置されていたと考えられる土師器甕40が出土した。甕は焚口の方向に口縁部を傾けたような状態で検出された（図16　Ｇ－Ｈ土層断面）。燃焼部下部の焚口付近は73×61cm、深さ10cm程度の浅い掘り込みが見られ、炭や焼土を含む土が堆積していた。カマドは燃焼部から煙道まで約14度の傾斜で立ち上がっていたが、先端部分は削平により検出することができなかった。

住居からは須恵器や土師器が出土している。35～39は須恵器である。35・38は杯身で住居の北端隅で見つかった。36はカマドの南側で出土したものであり、ほぼ完全なかたちで残っていた。37の杯身はカマドの内部で出土した。36と38は杯底部に同心円文の当て具痕跡が残る。39は鉢の口縁部と考えられる。40は先述したカマドの内部で検出した土師器甕でほぼ完形に復元することができ、口径19.8cm、器高31.0cm、胴部最大径27.2cmを測る。外面はハケ、内面はヘラケズリやナデによる調整が観察できる。これらの出土遺物から竪穴住居８は６世紀中葉頃のⅣ期に営まれたと考えることができる。

竪穴住居９（図16・21、図版５－３・６－２・16－５）

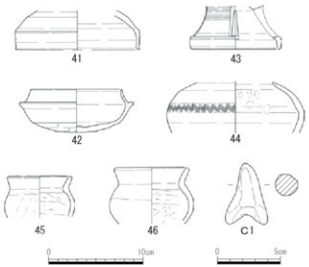


図21　竪穴住居９出土遺物（1/3・1/4）

竪穴住居９は、竪穴住居８の下に位置する方形の住居である。住居の下半分が失われており、残存長235cm、幅486cm を測る。主軸はＮ－68°－Ｗである。壁体溝は住居の床の周囲を「コ」の字状にめぐっており、幅は30～40cm、深さ５cm 程度を測る。竪穴住居９の北西辺は高さ約58cm が残存しており、本来これ以上の高さがあったものと考えられる。床面は標高17.85ｍ前後を測り、床面からピット状の遺構が５基検出されている。そのうち主柱穴として考えられるのはＰ１とＰ２であり、これに対応する柱穴は失われているが、本来は４本柱であったと考えられる。Ｐ１は径25cm 前後、Ｐ２は径15cm 前後、底部はともに標高17.6ｍとほぼそろっている。カマドは検出されておらず、床面には被熱痕跡も検出した範囲内では認められなかった。

住居からは須恵器や土師器等が出土している。41～44は須恵器である。41は杯蓋、42は杯身、43は高杯脚部、44は壺の体部と考えられる。45・46は土師器小形壺である。Ｃ１は鎌のようなかたちをした土製品である。これらの出土遺物から竪穴住居９はⅡ期に位置付けることができる。

溝６（図16・17、図版５－２）

斜面上部でＬ字状の平面形を呈する溝である。検出した範囲で長さ562cm、幅284cm を測る。溝は北側では幅が42cm、深さも13cm 程度と残存状態も良好であったが、南側になると次第に浅くなり、やがて消失する。南側に柱穴列３が存在しており、切り合いからこの溝６が先行して存在していたことが分かる。北西辺の主軸はＮ－25°－Ｅであり、竪穴住居６（Ｎ－60°－Ｗ）や竪穴住居７（Ｎ－58°－Ｗ）の主軸と直交していることから、これらの遺構は一体的に造られた可能性が高い。そうであるとすると、溝６は竪穴住居６・７の外周溝としての役割が考えられる。その場合、溝６の本来の長さは約９ｍに復元することができる。

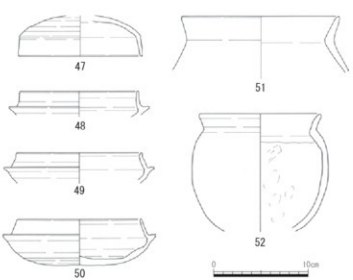


図22　溝７出土遺物（1/4）

埋土から須恵器や土師器が出土しているがいずれも小片であり、図示していない。竪穴住居６と竪穴住居７との関係も考慮すれば、この溝６は５世紀後葉から６世紀前半頃にかけてのⅡ～Ⅲ期の溝と考えられる。

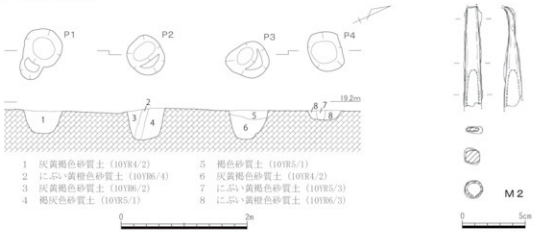


図23　柱穴列３（1/60）・出土遺物（1/3）

溝７（図16・17・22、図版５－２・３、13－７）

溝７は竪穴住居８の上方で円弧を描く溝である。880×398cmの範囲で存在し、幅は60cm前後、深さは30cm程度である。溝の底面は丘陵斜面の上部が一番高く、下方に行くにつれて次第に下がっており、検出した範囲では底部の比高差は40cm程度を測る。溝７に堆積していた埋土は周囲の遺構埋土と類似していたため溝７を含め周辺の遺構検出には困難を極めたが、溝７がこの付近に存在する遺構の中では最も新しい遺構のひとつと考えている。溝７は竪穴住居８を囲うように掘削されていることから、竪穴住居８の外周溝の役割を担っていたものと考えられる。

溝７からは須恵器や土師器が出土している。47～50は須恵器である。47は杯蓋であるが、焼成が良くない。48～50は杯身である。51・52は土師器甕である。これらの出土遺物は、特に須恵器の蓋杯の型式から竪穴住居８から出土したものより古い傾向を示しており、遺物の新旧から判断すれば溝７は竪穴住居８以前の遺構と考えることもできる。しかしながら、溝７に囲まれるように存在する竪穴住居８との有機的な関係を重視し、溝７は竪穴住居８と同様に６世紀中葉のⅣ期に機能していたものと推察したい。

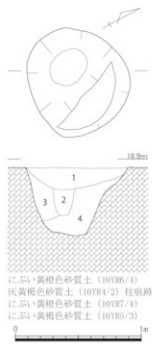
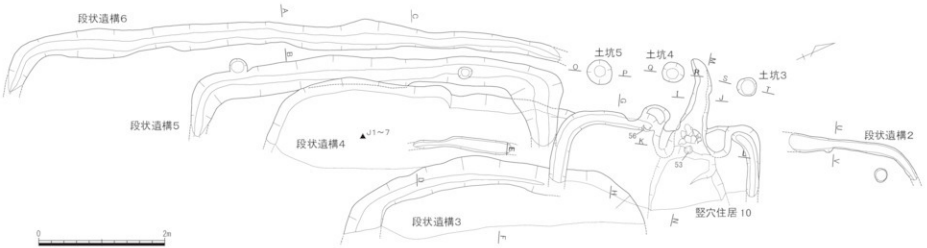


図24　土坑２（1/30）

溝８（図16）

竪穴住居６の上面に位置する弧状をなす溝である。北側は明瞭に検出できたが、南側は多くの遺構が切り合っていたため明確に検出することはできず、最終的にこの溝がどのような形状をしていたのかは明らかにすることができなかった。しかし、少なくとも溝７と交わる付近までは存在していたものと考えており、これで考えるならば、検出した長さは408cmを測る。遺構の状況から竪穴住居７につながっていくように見えるが、竪穴住居７はL字状の平面形を呈するのに対し、溝８は弧状で形状が一致しない。このことから両遺構は本来別の遺構であったと考えられる。出土遺物が少なく詳細は不明であるが、竪穴住居６より新しく溝７よりも古いと考えられることから、５世紀後葉から６世紀前半頃のⅡ～Ⅲ期に営まれたものと考えられる。

なお、溝の上面、標高18.7m付近に47×42cmの範囲で焼土面が広がっており、埋没過程で火を使用した痕跡と想定できる。



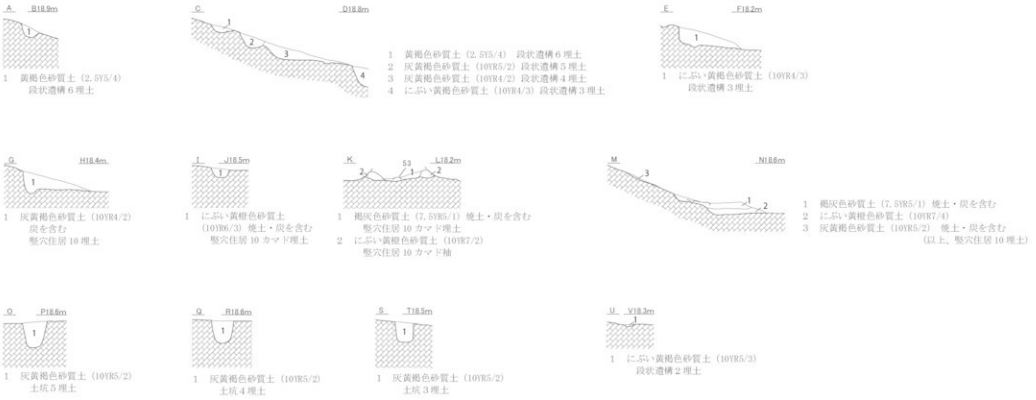


図25　竪穴住居10、段状遺構２～６、土坑３～５（1/60）

土坑１（図16）

竪穴住居７に接して存在する径約30cm、深さ11cmの小さなピットである。内部に炭を多く含む土が堆積していた。切り合い関係から、竪穴住居７よりも古い。出土遺物はないが、Ⅱ期以前の遺構と考えられる。

柱穴列３（図23、図版５－２、16－３）

溝６の南端で検出された柱穴列で、切り合い関係から溝６よりも新しいことが分かっており、いずれも径60cm 前後の柱穴４基で構成されている。柱穴列の軸はＮ－24°－Ｅに向いている。深さはＰ１～Ｐ３が35～50cmで、底面が標高18.6～18.7m前後と近い値を示すのに対し、Ｐ４の深さは15cm 程度と浅い。柱間はＰ１－Ｐ２間、Ｐ２－Ｐ３間とも160cm、Ｐ３－Ｐ４間で123cm を測る。このようにＰ１～Ｐ３は形状や柱間などの比較から一連の柱穴列と見ることができるが、Ｐ４はやや異質であり、別の遺構と見るべきかもしれない。Ｐ２とＰ４で柱痕跡と思われる土層を検出しているが、その他では見いだせていない。

柱穴から須恵器や土師器が出土しているが、小片のため図示していない。Ｐ１から鉄器**Ｍ２**が出土している。先端が折れ曲がっているが、刃先の形状からヤリガンナとは考えにくく、それ以外の工具の可能性を考えておきたい。柱穴列３は、溝６との切り合い関係や出土した須恵器から主に６世紀のⅢ～Ⅳ期に比定できる。

土坑２（図24）

溝７の南に位置する径85×79cm、深さ54cm の土坑である。２層が柱痕跡の形状にも見えるが、周辺に対応する柱穴も見られず、遺構の詳細は不明である。土師器の小片が出土したのみで、時期も不明と言わざるを得ない。

竪穴住居10（図25・26、巻頭図版２－３、図版６－３・７－１・14－１）

竪穴住居10は、段状遺構２と段状遺構４の間で検出された方形の住居で、下半部は畑地造成により削平され残っていない。主軸はＮ－53°－Ｗで、残存長268cm、幅333cm を測り、竪穴住居としては小形の部類に属する。カマドをもち、その両脇から幅20～28cm の壁体溝がめぐっている。床面は標高約17.96m付近と想定されるが、柱穴等は検出されていないため、住居の上屋構造は不明である。

カマドは住居のやや北寄りに設置されており、燃焼部と焚口から煙道にいたる長さ約165cm が残存していた。煙道は長さ99cm、先端付近で幅23cm、焚口に近い部分で幅44cm を測り、先端がわずかに曲がっている。煙道上部は失われているが、下半部の深さ17cm 程度が残存しており、中には炭や焼土を含む土が堆積していた。煙道は検出した地山斜面に沿うように約25度の角度で立ち上がっている。燃焼部は長さ66cm を測る。袖で囲まれており、袖を含む幅は124cm である。袖は地山とよく似た土であったため、地山を削り出して造ったものかどうか識別が困難であったが、左側の袖に径8cm 程度の小石が包含されていたことから２次的に造り付けられた袖であると考えた。内部には煙道と同様に焼土や炭を含む土が堆積していたが、燃焼部の中央で須恵器杯蓋**53**が伏せられた状態で見つかった。また、**53**の上方では土

図26　竪穴住居10出土遺物（1/4）

師器片が散乱していた。これらの土師器片はいずれも破片で十分に復元できなかったので図示していないが、主に甕や小形甕の破片で構成されていた。そのほか、燃焼部付近から須恵器55も出土している。焚口の前面には残存長88cm、幅119cm、深さ11cmの浅い掘り込みが見られ、にぶい黄橙色土（図25　M－N土層断面２層）が堆積していた。この層は炭や焼土をあまり含まないため、カマドを使用する前に掘られ、すぐに埋め戻された埋土と考えられる。

先述したように住居から土師器や須恵器が出土している。53はカマド中央に埋置されていた須恵器杯蓋である。54は須恵器杯身であり、カマド内で出土した。55は須恵器高杯の脚部であり、53上方の土師器片に混じって出土した。56はカマドの南側の壁体溝上面で出土した。これらの出土遺物から、竪穴住居10の利用時期は６世紀中葉頃のⅣ期と考えることができる。

なお、竪穴住居10上方に土坑３基（土坑３～５）が検出されているが、住居との関係は不明である。

段状遺構２（図25）

北端がやや東向きに湾曲している溝状の遺構である。残存長205cm、幅13cm、主軸はN－30°－Eを測る。検出した深さは３cm程度で残存状況は良くなく、床面も削平により失われている。近くに径21cm、深さ37cmのピットを検出しているが、段状遺構２との関係は不明である。平面図上の配置から段状遺構４と一体の遺構と考えることもできるが、推測の域を出ない。須恵器杯片が出土したのみであり、周辺の遺構との関係から古墳時代後期の遺構と考えられる。

段状遺構３（図25、図版７－２）

竪穴住居10及び段状遺構４の下段に位置する段状遺構である。検出した範囲で長さ137cm、幅476cmで、大半を畑地造成により失っている。平面形態は円形あるいは隅丸方形を志向しており、残りの良い箇所で深さ33cmを測る。床面は竪穴住居10より低い標高17.7m付近で、周囲に壁体溝がめぐっているが、北側では明らかにできなかった。検出した範囲が狭小であることから、柱穴などの施設は確認できていない。段状遺構３は埋土上面で竪穴住居10の壁体溝が確認できたことから、竪穴住居10より先行して存在していたことは明らかであるが、段状遺構４との新旧は土層断面で精査したが、両遺構の埋土が近似していたため判断することができなかった。しかし、出土した遺物の分析から段状遺構３は段状遺構４よりも古い可能性が高いと考えている。

遺構内からは弥生土器や土師器、須恵器が出土している。土師器は小片のため図示していないが、中に器壁の厚さが２mm程度と薄い、いわゆる「く」の字状の頸部をもつ薄甕の破片が含まれており、古墳時代前期～中期前半頃のものと考えられる。須恵器は１点出土しているが、遺構上面での検出である。この須恵器の評価であるが、周辺の遺構からの混入であるとすると、この段状遺構３の出土遺物には須恵器が含まれていないことになる。また、その他の土器はいずれも古墳時代中期前半以前の土器の可能性が高く、このように考えるならば、段状遺構３の時期はこの集落で須恵器が普及する以前の古墳時代中期中葉以前（Ⅰ期）と考えることができ、本遺跡の中では古い時代の遺構のひとつと推測できる。

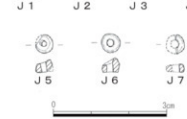


図27　段状遺構４出土遺物（1/1）

段状遺構４（図25・27～29、図版７－３・14－２、16－２）

段状遺構４は段状遺構３の上方、竪穴住居10の南に位置する遺構である。北端部を竪穴住居10に切られており、残

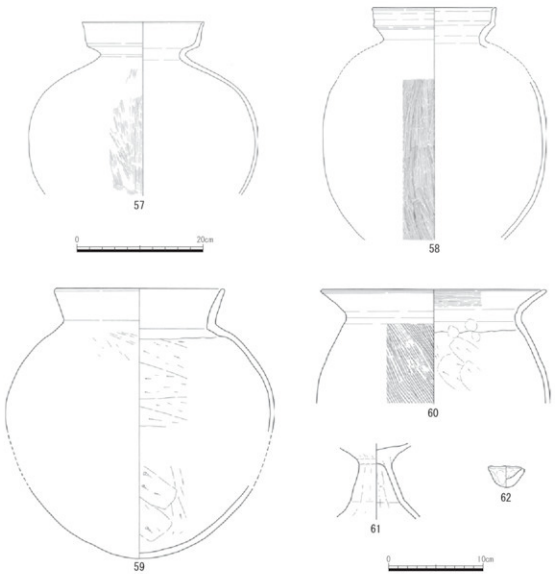


図28　段状遺構４出土遺物（1/4・1/6）

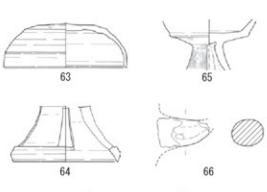


図29　段状遺構４周辺出土遺物（1/4）

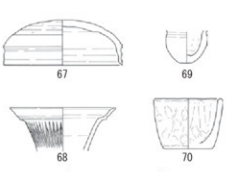


図30　段状遺構５出土遺物（1/4）

存長152cm、残存幅483cmを測る。北端において段状遺構５に伴う溝が段状遺構４の埋土上に造られていることから、段状遺構４は段状遺構５よりも古いことが分かる。平面は隅丸気味の方形であり、標高約18.05mに床面をもつ。壁際では明確な壁体溝は検出されていないが、段状遺構３の上部付近で検出長153cm、幅約20cm、深さ２～３cm程度の溝が伴う。それ以外にこの遺構内では主柱穴等の痕跡は見つかっていない。

段状遺構４及びその周辺からは土師器や玉類が多く出土している。特に段状遺構４の滑石製臼玉が出土した地点を中心に**57**～**59**など土師器が多く出土した。**57**・**58**は二重口縁壺である。**57**は精製粘土を使用しており、赤っぽい色調を呈する。**59**・**60**は「く」の字状の口縁部をもつ甕である。**61**は高杯脚柱部、**62**は手捏土器である。Ｊ１～７は滑石製臼玉である。調査時点で２個検出していたが、周囲の土を持ち帰り洗浄したところ新たに５点の臼玉が見つかった。

なお、段状遺構３・４、竪穴住居10付近は遺構が密集しており、それぞれの遺構の詳細を把握するまでに時間を要した。このように遺構の把握が十分になされていない段階で出土した土器が**63**～**66**である。**63**は須恵器杯蓋、**64**は須恵器高杯脚部、**65**は土師器高杯、**66**は土師器把手である。これらの出土遺物の大半は段状遺構４上面の堆積土に伴うものと考えられるが、周辺の竪穴住居10や段状遺構５に伴うものも含まれている可能性がある。ただ、段状遺構４から確実に出土した遺物の中には須恵器は確認できなかった。この点も踏まえながら、遺構内で出土した土師器をもとにその時期を推測すると、この段状遺構４は古墳時代中期前半のⅠ期に属する遺構の可能性が高い。

段状遺構５（図25・30、図版７－３）

段状遺構４の上部に位置する「コ」の字状の溝をもつ遺構である。溝の長さ593cm、幅約40cm、深さ24cmを測る。北端部が斜面下方に向けて屈曲しており、先述したとおり段状遺構４の埋土を切っている。床面は削平され残っていない。埋土中から土師器や須恵器が出土した。**67**は須恵器杯蓋、**68**は須恵器壺の口縁部である。**69**はミニチュアであるが、胎土から弥生土器の可能性もある。**70**は平底の土師器鉢である。これらの出土遺物から、段状遺構５はⅡ～Ⅲ期に営まれたものと考えられる。

段状遺構６（図25）

等高線に沿うように造られた溝状の遺構であり、南端部でＬ字状に折れ曲がる。残存長875cm、幅45cm程度、深さは20cm程度を測る。上方からの雨水を集め排水するための溝としての役割が考えられる。溝の内側にやや平坦な部分も残存し、床面と考えることもできるが総じて残りは良くない。出土した遺物は少ないが、土師器や須恵器が見つかっている。小片が多く時期を判別できる遺物は少ないが、当て具痕跡やタタキ痕跡を明瞭に残す甕片などから６世紀以降の遺構と考えられる。周辺の遺構と切り合い関係がなく、詳細な年代は不明であるが、出土した土器から６世紀以降のⅢ期以降と推定できる。

土坑３～５（図25）

竪穴住居10の斜面上部に並ぶ土坑である。土坑３は径61cm、深さ64cm、土坑４は径69cm、深さ72cm、土坑５は径82cm、深さ84cmを測る。いずれも形状がよく似ており、底面も標高18.0～18.1mと近く、互いに関連性がうかがえる。土坑３と土坑４の間が121cm、土坑３と土坑４の間が110cmと近い距離を測り柱穴列とも考えられるが、直線とならないため、ここではそれぞれ単独の土坑として取り扱っているが、下段に位置する竪穴住居10との関係も不明である。いずれの土坑からも土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期決定はできない。

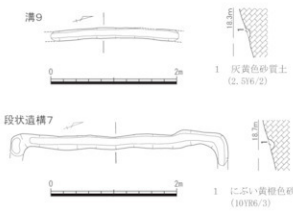


図31　溝９、段状遺構７（1/60）

溝９（図31）

段状遺構６の南端の斜面下に位置する細長い溝である。検出長204cm、幅16cm、深さ７cmを測る。一直線の溝で、等高線に沿うように設けられているが、その用途や意図は不明である。溝から須恵器や土師器が出土しているがいずれも小片で図示していない。詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況などからⅡ期以降の遺構と考えられる。

段状遺構７（図31）

調査区上段の南端で検出された「コ」の字状を呈する遺構である。検出幅346cm、溝の幅22cm、深さ10cmを測る。溝に囲まれた内部に床面あるいは作業面のような平坦地があった可能性があるが、削平されており残存していない。出土遺物は少なく、遺構の時期を特定できるものはなく、詳細は不明である。

溝10～14（図32、図版８－１）

下段調査区の北側に溝が５条密集している。溝10以外の溝は切り合い関係にあるが、それによると溝13が一番新しく、溝12が一番古いものと推測できる。溝11と溝14の新旧は不明である。

溝10は検出長144cm、幅23cmである。Ｌ字状に折れ曲がり、埋土から須恵器高杯の脚部71が出土した。溝11は緩やかに弧を描き、検出長310cm、幅18cmを測る。土師器小片が出土している。溝12は検出長364cm、幅26cmであり、出土遺物はなかった。溝13は検出長185cm、幅31cmを測る。埋土から弥生土器が出土しているが上方からの混入であろう。溝14は検出長400cm、幅21cmを測る。溝の底部に杭跡と思われる痕跡が計５本見つかっている。間隔も一定でなく、用途は不明である。埋土から須恵器杯片と思われる土器が出土しており、古墳時代後半期以降の溝と考えられる。

これらの溝は、溝10と溝14で須恵器が出土していることから、溝13も含めてⅡ期以降のものと考えられる。出土遺物が少なく根拠に乏しいが、その他の溝もこれらに近い年代に比定できよう。

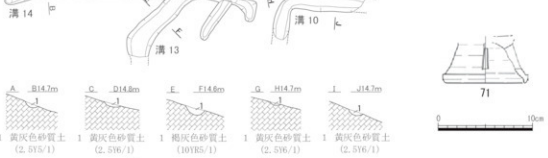


図32　溝10～14（1/60）、溝10出土遺物（1/4）

溝15（図33、図版８－２）

Ｌ字状の溝であり、検出範囲は396×207cmである。深さは６cm程度と残存状況は良くない。竪穴住居11の外周をめぐるように配置されていることから、竪穴住居11の外周溝としての役割があった可能性がある。埋土から須恵器や土師器が出土しているが、詳細な年代特定ができるものはない。竪穴住居11や溝16の状況と合わせ、古墳時代後期前半頃のⅢ期の遺構と考えられる。

溝16（図33、図版８－２）

溝15の下方に位置する溝である。南端を段状遺構８により切られている。残存長293cm、深さ３～４cm程度で、溝15同様に残存状況は良くない。溝15と同様に竪穴住居11の外周溝の一部である可能性がある。埋土から土師器小片が出土しているが、器種等は不明である。竪穴住居11や段状遺構８との関係からⅢ期の遺構と考えられる。

竪穴住居11（図33、図版８－２）

段状遺構８の下部に広がる方形の遺構で、全体の３分の１程度しか残存していない。残存長150cm、幅499cm、壁際の深さ26cmを測り、主軸はＮ－68°－Ｗである。床面が残存しており標高14.75mを測るが、床面周辺に壁体溝は確認できず、柱穴も検出できなかった。段状遺構８との切り合い関係も土層断面で精査したが、両遺構とも同質の埋土で両遺構の新旧を識別するのは困難であった。竪穴住居11上方の溝15・16をこの住居の外周溝と考えれば、溝16が段状遺構８に先行していることから、竪穴住居11のほうが段状遺構８よりも古い遺構なのではないかと考えている。出土遺物は土師器が数片出土した程度であり、詳細は不明であるが、Ⅲ期以前の遺構である可能性が高い。

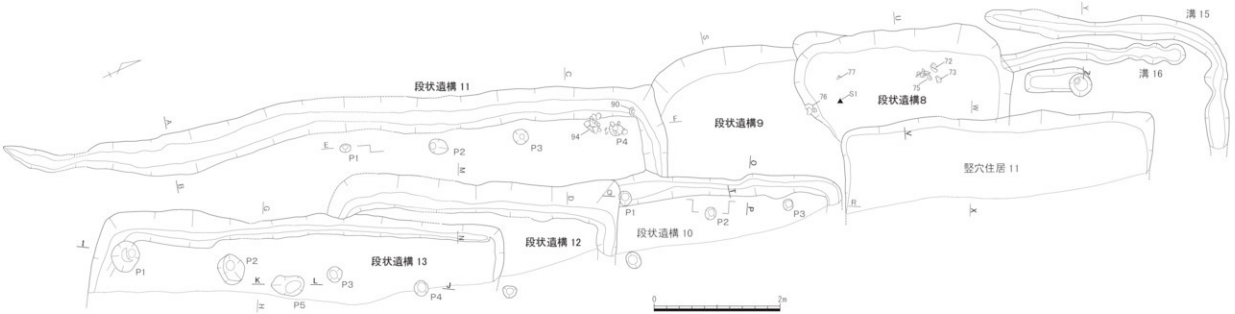
段状遺構８・段状遺構９（図33・34・35、図版８－２・８－３・９－１・14－３・14－４・16－４）

竪穴住居11、段状遺構10の上方に位置する土坑状の遺構である。検出当初は段状遺構８と段状遺構９を同一の遺構と認識して掘り下げていたが、最終段階に至り北側がやや深く掘りこまれていることが分かり、ふたつの遺構が重なっているものと判断した。

段状遺構８は残存長155cm、幅348cm、深さ36cmを測る。床面は平坦ではないが、標高14.93m前後を測る。内部には柱穴などの施設は見受けられない。埋土から須恵器や土師器など多数の遺物が出土している。72～76は須恵器である。72は杯蓋である。73～75は杯身である。75の底面にはヘラで「×」と描かれている。76は甕の体部であるが、焼成不良である。77は土師器の把手である。Ｓ１は砥石で半分は欠損している。側面に使用痕跡が見られ、被熱している。

段状遺構９は北側を段状遺構８により、南側を段状遺構11によって削平を受けているが、残存長214cm、残存幅234cm、深さ42cmを測る。床面が残存しており、斜面下方に向けて緩やかに傾斜している。そのため、床面の標高は14.8～15.0mと高低差がある。遺構内には柱穴などの痕跡は見られない。出土遺物として須恵器や土師器があるが、当初段状遺構９と段状遺構８を同一の遺構として考え遺物を取り上げていたため、両遺構の遺物を正確に分類できていない。しかし78～89の土器の大半は段状遺構９に伴うものであると考えている。78～84は須恵器であり、78～81は杯蓋である。82～84は杯身である。80は天井部に「－」のヘラ記号が見られる。85～89は土師器である。85は甕、86・87は把手である。88は高杯の杯底部である。89は手捏土器である。

段状遺構８と９は切り合い関係から、段状遺構８のほうが新しいものと考えられるが、出土遺物から両者の時期差はさほど大きなものではないことが分かる。このことから、両遺構はⅢ期に営まれたものと考えられる。



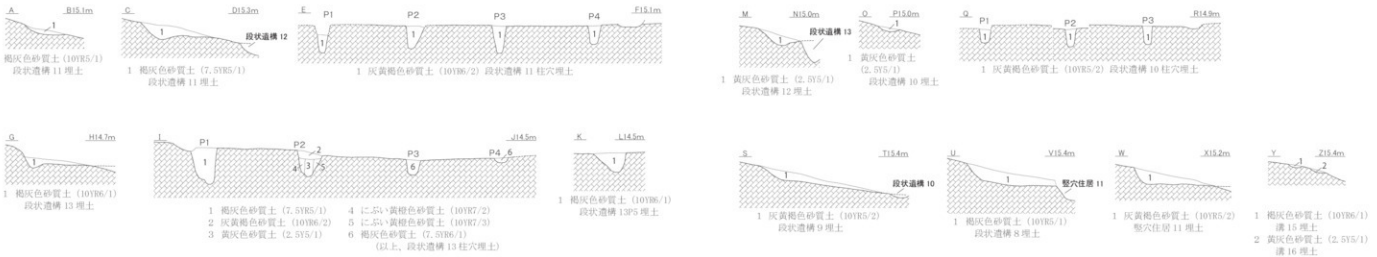


図33　竪穴住居11、溝15・16、段状遺構８～13（1/60）

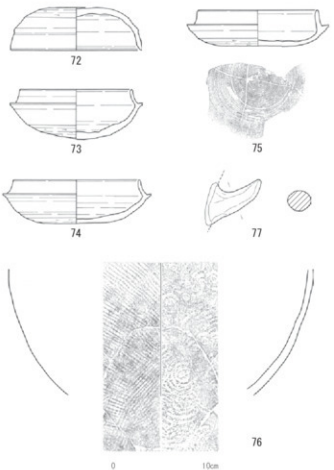


図34　段状遺構８出土遺物（1/4）

段状遺構10（図33、図版９－１）

段状遺構９の下段、段状遺構12の北側に位置する。Ｌ字状の溝を有するが、南側は段状遺構12により失われている。検出長365cm、溝の幅30cm前後、残存している深さは９cm程度である。床面も残存しており緩やかに下方に傾斜している。平均的な床面の標高は約14.75mである。遺構内で柱穴が３基（Ｐ１～Ｐ

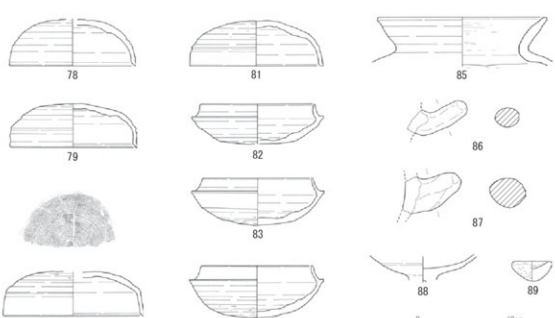


図35　段状遺構８・９周辺出土遺物（1/4）

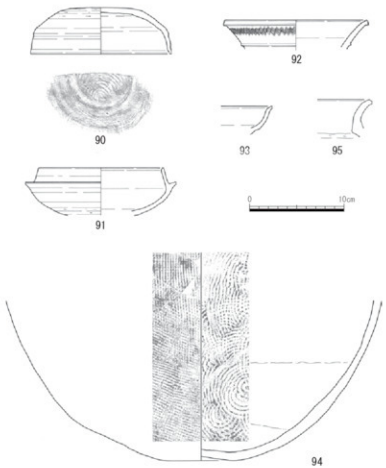


図36　段状遺構11出土遺物（1/4）

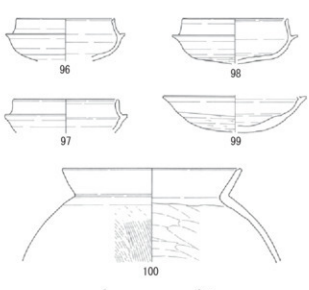


図37　段状遺構13出土遺物（1/4）

３）検出できた。直線に並んでいるわけではないが、形状はいずれも平面が円形で径約20cm、底部の標高14.4m前後と互いに近似している。また、柱間も135cm前後であり、相互に関連性の高い柱穴といえ、柵状の構造物があった可能性が考えられる。遺構内からの出土遺物は土師器小片１点のみであった。そのため詳細な年代は不明であるが、周辺との切り合いからⅢ期の遺構と考えられる。

段状遺構11（図33・36、図版９－２・14－５）

段状遺構12・13の上部の平坦面で、Ｌ字状の溝と柱穴列を伴う遺構である。検出長は1056cm、溝の幅は各所で異なるが40～70cm、深さは深いところで21cmを測る。溝に囲まれた内部には床面をもち、その標高は14.9m前後を測る。下方に段状遺構12・13が存在するが、いずれも埋土がよく似ていたため新旧関係を明確にすることができなかった。遺構内には溝に沿うように４基の柱穴（Ｐ１～Ｐ４）が並んでおり、柱穴間は145cm前後を測る。この柱穴列のほかに遺構は見られないため、ここに柵のような施設があったと考えられる。Ｐ１はやや小さく径17cm前後、Ｐ２～Ｐ４は径25cm前後を測る。Ｐ１～Ｐ３は床面から40～45cmほどの深さをもち、標高14.5m付近を底としているが、Ｐ４はそれらより底が10cmほど浅い。

遺構内からは須恵器や土師器が出土している。90～94は須恵器である。90は杯蓋

で内面に同心円の当て具痕跡が残る。**91**は杯身である。**92**は壺の口縁部である。**93**は甕の口縁部と考えられる。**94**は甕である。体部下半部の破片のみであり、内外面にタタキ痕跡を明瞭に残す。**95**は土師器甕の口縁部である。これらの出土遺物から段状遺構11はⅢ期の遺構と考えることができる。

段状遺構12（図33、図版９－２）

段状遺構11と段状遺構13の間に存在する遺構であり、残存長117cm、幅455cmを測る。「コ」の字状に溝がめぐり、溝の幅50cm程度、深さ28cmを測る。周辺の遺構との切り合いを土層断面で確認したが、どれも土質がよく似ており、新旧関係を見い出すことができなかった。床面も残存しており、標高14.6m付近を測る。周辺の遺構と比較すると床面は段状遺構13よりも30cmほど高く、段状遺構11よりも30cm程度低い。埋土から須恵器や土師器が出土したが小片のため図示していない。須恵器短脚高杯が見られることや、周辺の遺構との切り合いからⅡ～Ⅲ期の遺構と考えることができる。

段状遺構13（図33・37、図版９－２・９－３・15－１）

方形の区画溝をもち、内部に柱穴列をもつ段状遺構である。残存長147cm、幅660cmを測る。壁体溝をもち、その幅は最大58cm、深さ26cmを測る。壁体溝は西辺では明瞭であるが、北側や南側になると不明瞭となる。床面の標高は14.2～14.3mでやや南に傾斜している。内部に柱穴列が見られ、段状遺構13の西辺と５度ほど主軸を異にする。Ｐ１・Ｐ２は径45～50cm程度であるが、Ｐ３・Ｐ４は径25cm程度と小さい。底面の高さはＰ１が標高13.8m、Ｐ２・Ｐ３で標高13.9m前後、Ｐ４が14.14mでＰ４が浅い。柱間はＰ１－Ｐ２間、Ｐ２－Ｐ３間が160cm前後で、Ｐ３－Ｐ４間が142cmとやや狭い。柱穴にはそれぞればらつきが見られるが、欄のような施設があった可能性が考えられる。また、段状遺構12内にある柱穴１基も一連のものと考えるならば、段状遺構13とは別遺構の欄状の施設があった可能性が考えられる。その他、径52×30cm、深さ30cmほどのピット（Ｐ５）があるが、柱穴列の軸から少しはずれており、用途や機能は不明である。

埋土中から須恵器や土師器が見つかっている。**96**～**99**は須恵器杯身である。**100**は土師器甕である。これらの出土遺物から、段状遺構13はⅡ～Ⅲ期ごろに営まれたと考えられる。

柱穴列４（図38、図版10－１）

柱穴４基を伴う柱穴列で、ほぼ一直線で主軸は等高線の方向に近いＮ－25°－Ｅを測る。Ｐ１は平面形が隅丸方形気味であるが、残りのものは円形あるいは不整円形を呈する。径は多少の差があるが60cm程度であり、底面は標高14.6～14.7mを測る。柱間はＰ１－Ｐ２間で151cm、Ｐ２－Ｐ３間で190cm、Ｐ３－Ｐ４間で164cmとやや不ぞろいである。この柱穴列に対応する柱穴が周辺には見当たらないことから、建物を構成している柱穴とは考えにくい。柱穴内からは須恵器や土師器がわずかに出土しており、須恵器はⅡ～Ⅲ期に属するものである。よって、柱穴列４はⅡ～Ⅲ期に比定できる。

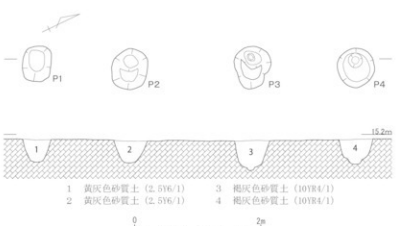


図38　柱穴列４（1/60）

竪穴住居12（図39・40・41、図版10－２・11－１・15－２）

竪穴住居13の北寄りに位置する方形の竪穴住居である。残存長195cm、残存幅464cmを測り、主軸はＮ－60°－Ｗである。大部分を竪穴住居13によって切られており、残存している部分はわずかである。床の周囲に壁体溝をめぐらし、北西側で幅34cm、深さ約30cmを測る。北東側では壁体溝が２条検出され、少なくとも１回の建て直しがあった可能性がある。壁体溝の埋土の観察から内側の壁体溝のほうが新しいように見受けられた。床面は、竪穴住居13の影響を受けていない北東部分が残存しており、標高14.15m付近が床面であったと想定される。柱穴はＰ１とＰ２がこの住居に伴うものと見られ、本来は４本柱であった可能性が高い。柱間は275cmで、柱穴の底面はともに標高13.7m付近でそろっており、床面からの柱の根入れは約45cmであったことが分かる。

なお、竪穴住居12からは遺物が出土しているが、この竪穴住居12の存在が判明したのは、竪穴住居13の北東辺が検出されてからであったため、それまでに検出した出土遺物については竪穴住居13のものと厳密に区分できていないが、**101**は出土位置からこの住居に伴う須恵器杯蓋である。これらの出土遺物や、この住居が竪穴住居13よりも古いと考えられることから、竪穴住居12はⅡ期に築造されたものと考えられる。

竪穴住居13（図39・40・41、図版10－２～４、11－１・15－４）

溝18を外周溝とし、竪穴住居12に隣接して新しく設けられた住居である。住居は３分の１程度が調査区内に残存しており、３分の２程度が調査区外に位置していることになるが、田畑の状況から削平されて残存していないものと考えられる。平面形は方形で、残存長185cm、幅596cm、深さ約50cmを測る。主軸はＮ－63°－Ｗである。壁体溝をめぐらせており、北東辺及び南西辺では幅30cm程度を測る。北西辺では壁体が50cmほど上部まで立ち上がっている部分があり、実際はそれ以上の深さがあったものと考えられる。床面は標高14.02～14.08m付近であり、竪穴住居12と比べると10cmほど低くなっている。主柱穴と考えられるピットが２基（Ｐ３・Ｐ４）見つかっているが、住居の残存状況を考えると本来は４本柱であった可能性が高い。Ｐ３－Ｐ４間は313cmを測る。Ｐ３は径約30cmで、深さ40cm、Ｐ４は径約40cm、深さ54cmとやや不ぞろいであるが、位置的に竪穴住居13の平面に適合しており、柱穴として間違いないと思われる。壁体溝の北西辺の壁面には竪穴住居に使用されていたと考えられる木材の圧痕のような痕跡が見受けられた。（図版10－３）。また、北西側壁体の中央やや南よりで骨片（図版10－４）が検出されたが、細かい破片となっていた上、脆弱であったため詳しい分析などは行えていない。なお、調査した範囲内では焼土や炭は検出されておらず、炉やカマドなどを含む火どころの痕跡は検出されていない。

住居内からは比較的多くの遺物が出土したが、特に床面に土器が放置され破片となって検出される事例が多かった。**102**～**105**は須恵器である。**102**は杯身である。**103**は甕で、ほぼ完形の状態でＰ３近くの床面から出土した。**104**・**105**は高杯脚部であり、ともに短脚で透かしをもつ。**106**は把手である。図示していないがこの把手と同一個体ではないかと思われる瓶の破片が検出されている。**107**は土師器甕である。Ｐ４の東側付近の床面から破片の状態で出土した。これらの出土遺物から、竪穴住居13の営まれた時期は５世紀後葉のⅡ期と考えることができる。

なお、竪穴住居12・13付近で両住居を精査する以前の段階に当該住居付近にトレンチを設けたり、掘り下げを行ったりしたが、その時にも多くの土器が出土した。この時に出土した土器を図41に掲載しておく。**108**～**109**は須恵器杯身、**110**は無蓋高杯と考えられる。**111**は土師器甕である。

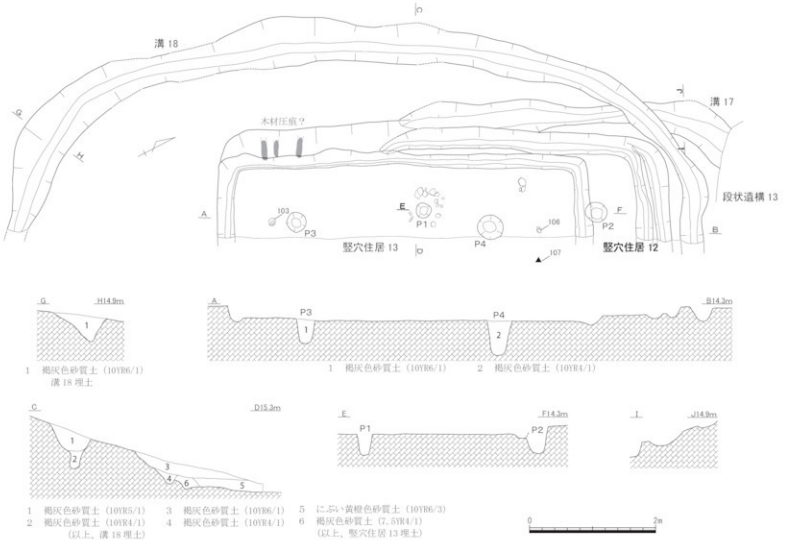


図39　竪穴住居12・13、溝17・18（1/60）

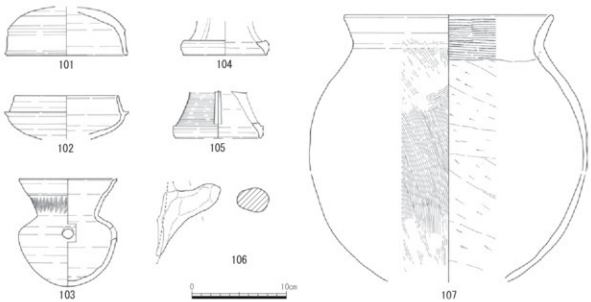


図40　竪穴住居12・13出土遺物（1/4）

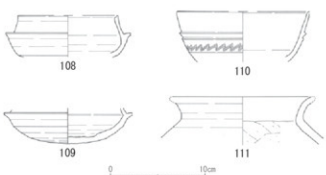


図41　竪穴住居12・13周辺出土遺物（1/4）

溝17（図39、図版10－２・11－１）

竪穴住居12の上方に残存する溝である。残存長528cm、幅53cm、深さ23cmを測る。竪穴住居12上方に等高線に沿うように掘削されているが、北側では谷に向かって緩やかに曲がる。段状遺構13、溝18、竪穴住居12・13と切り合っているが、その中で一番古い遺構と判断している。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、Ⅱ期の遺構と考えられる。

溝18（図39・42、図版10－２・11－１）

竪穴住居13を囲むように掘削され、斜面上方から流入する雨水等から竪穴住居13を保護するために造られた外周溝と考えられる。円弧状を呈しており、斜面下方は削平のため消失していた。南側では段状遺構14と、北側で溝17と切り合っているが、溝18は段状遺構14より古く、溝17より新しいと推測できる。検出範囲は1110×378cmを測り、溝の幅は場所によって異なるが40～80cm、深さは、深いところで72cmを測る。

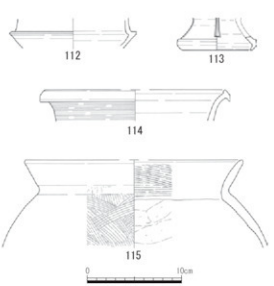


図42　溝18出土遺物（1/4）

溝内からは土師器や須恵器が出土している。112～114は須恵器である。112は杯身、113は高杯脚部、114は壺の口縁部である。115は土師器

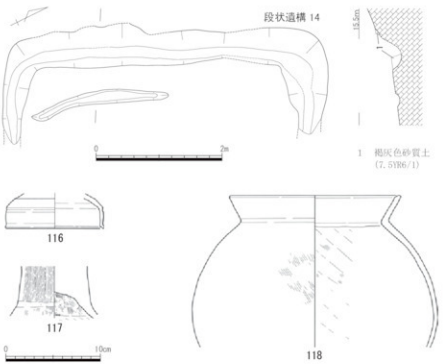


図43　段状遺構14（1/60）・出土遺物（1/4）

甕である。溝の存続時期は出土した遺物や竪穴住居13の時期からⅡ期と考えられる。

段状遺構14（図43、図版11－２、15－３）

竪穴住居13の外周溝と考えられる溝18を一部切るかたちで存在する段状遺構である。「コ」の字状の溝状の遺構で、本来存在していた可能性のある床面はすでに失われている。検出した範囲は518×192cmで、周囲をめぐる溝は幅50～60cm、深さ約40cmを測る。溝の一部が後述する掘立柱建物１のＰ４により切られている。内部に残存長220cm、幅約20cm、深さ７cmの溝が存在するが、段状遺構14との関係は不明である。

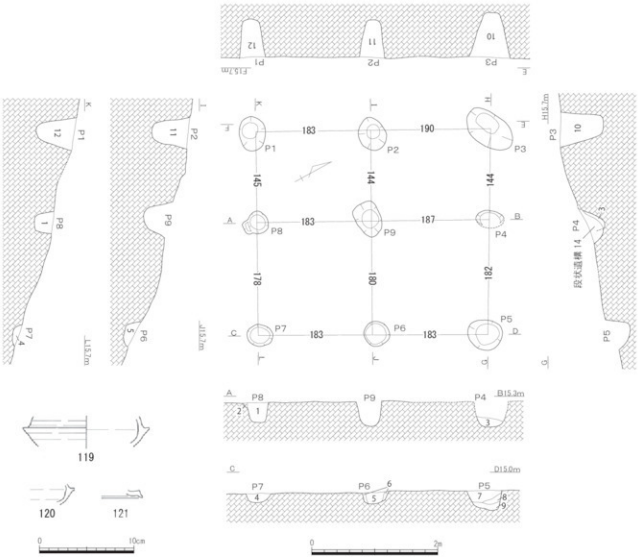
埋土中から土師器や須恵器が出土している。**116**は須恵器壺蓋と考えられる。**117**は土師器であるが用途不明品である。**118**は土師器甕である。これらの出土遺物や周辺の遺構の切り合い関係から段状遺構14はⅢ期に比定できる。

掘立柱建物１（図44、図版11－３）

段状遺構14や段状遺構15と一部重複して存在する２×２間の掘立柱建物である。柱穴９基からなり、その平面形は円形や楕円形あるいは不整円形をなす。

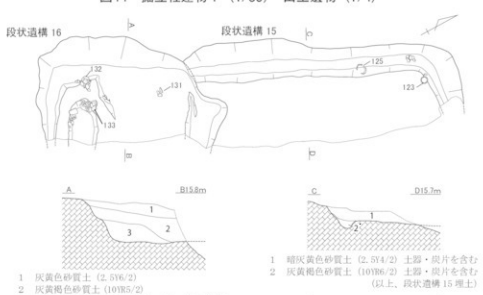
上段の柱穴（Ｐ１～Ｐ３）は径50～80cm前後を測り、深さは約60～70cmを測る。上段の柱穴の底面は標高約14.8～14.9mと比較的そろっている。中段の柱穴（Ｐ４・８・９）は上面が削平されているが、中段の柱穴の底面は標高14.8～14.9mを測り、上段のものと近似している。下段の柱穴（Ｐ５～Ｐ７）は削平により残存状況が良くなく深さ15～39cm程度を残すのみである。底面の標高は14.4～14.5mを測り、上段と中段のものより40cm程度深い。

梁間（北東－南西方向）は183～190cmとほぼそろっているが、桁行（北西－南東方向）では、上段と中段は約145cm、中段と下段は180cm前後と異なっており、下段の柱列が水平距離で35cm程度下方に設定されている。なお、柱穴Ｐ４が段状遺構14を切っていることから、掘立柱建物１は段状遺構14より新しい遺構であることが分かる。



1　灰褐色砂質土（7.5YR4/2）
2　灰褐色砂質土（7.5YR4/2）
3　灰褐色砂質土（7.5YR6/2）
4　灰褐色砂質土（7.5YR6/2）
5　褐灰色砂質土（10YR6/1）
6　明黄褐色砂質土（2.5YR7/6）
7　黄灰色砂質土（2.5Y6/1）
8　灰白色砂質土（2.5Y7/1）
9　灰黄褐色砂質土（10YR6/2）
10　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
11　褐灰色砂質土（7.5YR5/1）
12　褐灰色砂質土（7.5YR5/1）

図44　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）



1　灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
2　灰黄褐色砂質土（10YR5/2）
3　暗灰黄色砂質土（2.5YR5/2）土器・炭片を含む
（以上、段状遺構 16 埋土）

1　暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）土器・炭片を含む
2　灰黄褐色砂質土（10YR6/2）土器・炭片を含む
（以上、段状遺構 15 埋土）

図45　段状遺構15・16（1/60）

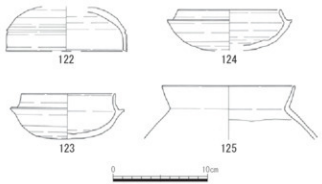


図46　段状遺構15出土遺物（1/4）

柱穴内からの遺物は少ないが、建物の時期を推測できる遺物として土師器や須恵器が出土している。119・120は須恵器杯身であり、119はＰ６、120はＰ１から出土した。121はＰ５から出土した須恵器小片であり、高杯脚裾部と考えられる。これらの出土遺物でもっとも新しい121の須恵器の製作年代や段状遺構14との切り合い関係から掘立柱建物１は７世紀の遺構と考えることができよう。

段状遺構15（図45・46・48、図版12－１、15－５・６、16－３）

掘立柱建物１と段状遺構16の間に位置する。南側が段状遺構16によって削平されており、残存長193cm、残存幅441cm、深さ約30cmを測る。溝がＬ字状に残存しているが、本来は「コ」の字状であったと考えられる。床面が残存しており、その高さは標高約15.25mを測る。床面には掘立柱建物Ｐ８の柱穴が見つかったのみで、それ以外の遺構は見られなかった。

遺構内からは床面を中心に須恵器や土師器が出土した。122は須恵器杯蓋、123・124は須恵器杯身であり、124は確認調査Ｔ10で出土した。125は土師器甕である。遺物は主に北側で出土する傾向が見られた。これらの出土遺物から段状遺構15はⅡ～Ⅲ期にかけて使用されたと考えられる。

段状遺構16（図45・47・48、図版12－１・２、15－５・６、16－３）

段状遺構15の南側に位置する遺構である。下段部が造成により失われているが、２分の１程度が残存しているものと考えられる。残存長173cm、幅303cm、深さ68cmを測り、これまで述べてきた段状遺構と比較すると小さいのが特徴である。周辺に壁体溝のような溝は見られない。標高15.04m付近を中心に床面が残存しているが、部分的に凹凸がある。内部には柱穴等の施設はなかった。

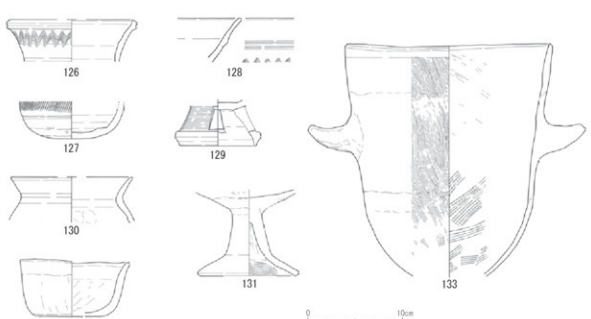


図47　段状遺構16出土遺物（1/4）

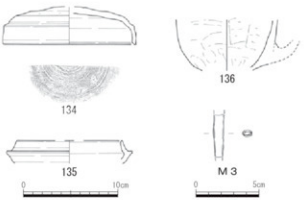


図48　段状遺構15・16周辺出土遺物（1/3・1/4）

床面からは、規模が小さいわりに多くの遺物が出土した。126～129は須恵器である。126は壺、127は甕の体部と考えられる。128は無蓋高杯の口縁部と考えられ、外面に櫛描波状文が見られる。129は高杯脚部である。130～133は土師器である。130は甕、131は高杯、132は平底の鉢である。133は甑である。132・133の土師器は遺構の南半部の床面上から出土した。これらの出土遺物から、段状遺構16はⅡ～Ⅲ期に営まれたと考えられる。

なお、段状遺構15及び段状遺構16を検出するにあたり、周辺に設けたトレンチや遺構を検出するまでに掘削した埋土から遺物が出土している。134は須恵器杯蓋で、内面に同心円文の当て具痕跡が見られる。135は須恵器杯身、136は把手付の椀と考えられる。Ｍ３は用途不明の鉄器片である。

竪穴住居14（図49、図版12－３）

竪穴住居14は段状遺構16の南西に位置する方形の住居である。残存長212cm、幅480cm、主軸Ｎ－64°－Ｗを測る。「コ」の字状に幅40～50cm 程度、深さ12cm 程度の壁体溝を検出したが、下半部は削平により消失している。床面もすでに失われており、全体的に遺構の残存状況は悪い。住居内からピットが複数検出されている。Ｐ１は径25cm 程度、深さ51cm のピットである。Ｐ２は径30cm 程度で、

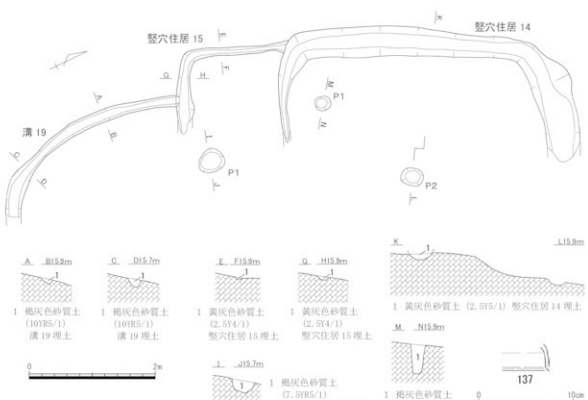


図49　竪穴住居14・15、溝19（1/60）、竪穴住居14出土遺物（1/4）

残存している深さは14cmを測る。位置的に中央穴と考えられるが深すぎるため別遺構の可能性が高い。そのほかに住居内から遺構は検出されておらず、主柱穴も特定するには至っていない。出土した遺物はわずかで、いずれも壁体溝からの出土である。137は須恵器杯蓋であり、この遺物から竪穴住居14はⅡ～Ⅲ期の住居と考えられる。

竪穴住居15（図49、図版12－３）

竪穴住居14と溝19に挟まれた遺構である。検出した範囲で185×138cmを測る。L字状に折れ曲がる溝を検出した。溝19とは異なり、溝の底部が水平を志向することから排水のための溝というよりも竪穴住居の壁体溝の可能性が考えられる。しかし、北側は検出できておらず、竪穴住居14と平面を同じにするのか、あるいは、竪穴住居14の拡張部分として竪穴住居15が造られたのか詳細は不明である。住居内からは径40cmほどのピット（Ｐ１）も検出されているが、住居との関係は不明である。出土遺物はない。竪穴住居14に近い時期と推定するとⅡ～Ⅲ期の可能性が高い。

溝19（図49、図版12－３）

竪穴住居15の壁体溝から支線のように弧を描いてのびる溝である。遺構の底面で高低差があることから溝と判断したが、その形状から竪穴住居15と有機的な関係をもつものと考えられる。出土遺物はなく、詳細は不明であるが、竪穴住居15と同様のⅡ～Ⅲ期の遺構である可能性が高い。

第３節　包含層等出土の遺物

山の間遺跡では表土下から遺構面に至るまでの包含層等の掘り下げにより、弥生土器、土師器、須恵器等の多くの遺物が出土したが、その多くは上方から流れてきたものと考えられる。以下にその主なものを掲載する（図50～53、図版16－１・４・５）。

弥生土器は調査区全般にわたって散見された。138は壺である。口縁部の突帯に刻目が施されている。139は長頸壺である。140は小形の甕である。141は高杯の杯部である。142は高杯脚裾部である。143は器台の脚部と考えられ、三角形あるいは方形の透かしと思われる痕跡が残る。144は器台の体部である。円筒形であり、円形と方形の透かしが見られる。145も器台と考えられる。円形あるいは三角形と思われる透かしに円形の竹管文が施されている。146～148は大形の器台と考えられ、いずれも鋸歯文が施されている。146は口縁部と考えられる。147は破片のため詳細は不明であるが、外に広がるような形状を示している。148は脚裾部である。

今回の調査で確実に弥生時代に属すると考えられる遺構は検出されていない。これらの弥生土器の多くは包含層あるいは遺構の埋土中から出土したもので、本来、丘陵上部に存在していた弥生時代の遺跡から流入した土器なのであろう。もっとも古いのは138の壺で弥生時代中期中葉に比定できるが、弥生土器のほとんどは弥生時代後期のものと考えられる。器種であるが、壺や甕なども見られるが、通常の集落で出土する場合と比べると、器台の割合が多い印象がある。このことから、近隣の丘陵に所在していた弥生時代の遺跡は、集落というよりむしろ墳墓のような性格のものが多かった可能性も考えられる。

須恵器も調査区全般にわたって多く出土した。149～151は杯蓋である。149は焼成不良の杯蓋である。152～154は杯身である。152のように口径が10.0cmと小さく口縁部が立ち上がるものや、154のように口径が13cmと大きく、口縁がやや内傾するものなどがある。155は壺蓋、156は短頸壺である。

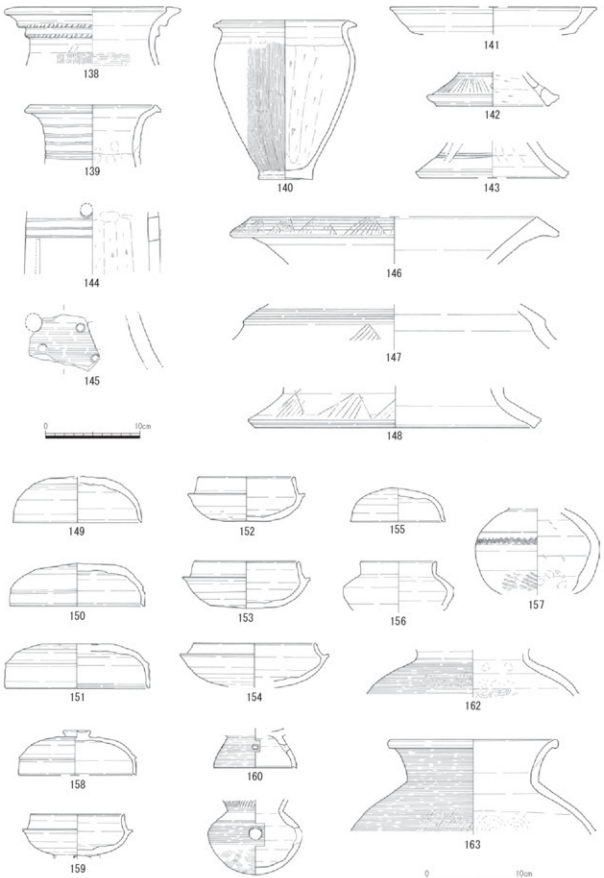


図50　包含層等出土の遺物（1）（1/4）

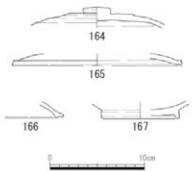


図51　包含層等出土の遺物（２）（1/4）

157は体部が球状をなす壺であり、体部に櫛描波状文が見られる。158はつまみを有する高杯の蓋である。159は高杯の杯部であるが、脚部の痕跡がわずかに残る。形状から短脚が想定される。160は高杯脚部である。円形の透かしをもつ。161は鉢である。162・163は壺である。内面のタタキの痕跡をナデ消しているが、完全には消しきれていない。これらの須恵器は、山の間遺跡の集落の盛行期にあたるⅡ～Ⅳ期のものである。

164～167は古墳時代より後の時代の須恵器である。

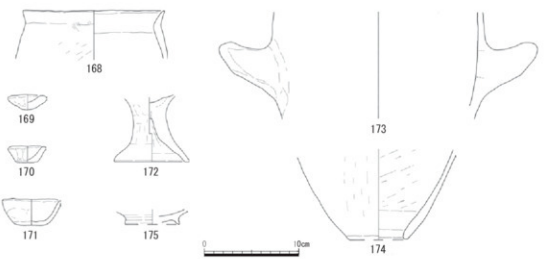


図52　包含層等出土の遺物（３）（1/4）

164～166は杯蓋である。166は蓋の内面にかえりが残存しているが、165には見られない。167は高台をもつ椀片である。

土師器も調査区全体にわたって多く出土しているが、破片でもろいものが多く掲載できるものは少ない。168は粗製の土器であり、二次焼成を受けている。169～171は手捏土器である。171は器壁が薄く、全体に二次焼成をうけ脆弱になっており、製塩土器の可能性がある。172は高杯脚部である。173・174は甑である。174は甑底部である。破片であり、やや歪んでいることから、底径は信頼性に劣るが、甑の底径が分かる資料は山の間遺跡ではこれ以外にない。175は土師質の高台付椀であり、鎌倉時代のものである。

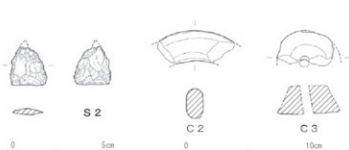


図53　包含層等出土の遺物（４）（1/2・1/3）

その他、石器や土製品が若干出土している。Ｓ２はサヌカイト製の石鏃である。Ｃ２は環状の土製品である。Ｃ３は紡錘車であり、半分が欠損している。

第４章　総括

第１節　山の間遺跡の変遷

１　時期区分

発掘調査の結果、山の間遺跡は弥生時代から中世にかけての集落跡であることが分かったが、遺構が残存しているのは主に古墳時代であり、竪穴住居15軒や段状遺構16基など多数の遺構が検出された。ここでは、この山の間遺跡の特徴を示す古墳時代について、集落の動向を詳細に検討するため、次のような時期区分を設定する。

Ⅰ期：古墳時代中期中葉（須恵器編年[1]ＴＫ208型式）以前
Ⅱ期：古墳時代中期後葉（ＴＫ23・47型式）
Ⅲ期：古墳時代後期前半（ＭＴ15・ＴＫ10型式）
Ⅳ期：古墳時代後期後半（ＭＴ85～ＴＫ209型式）

２　集落の変遷

弥生時代

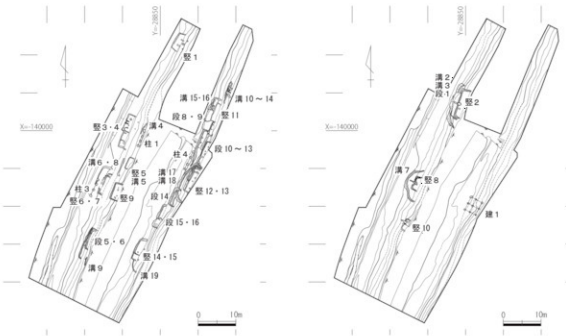
山の間遺跡では弥生時代の遺構は確認できていない。しかし、包含層等出土の遺物として報告しているとおり、調査区から弥生土器等が出土している。出土した弥生土器の大半は後期のものであるが、古いもので中期中葉に属する壺（138）がある。山の間遺跡周辺ではかつて蛤刃石斧が採集されたと報告されており[2]、また、隣接する着銅遺跡においても相当量の弥生土器が出土している[3]ことから、周辺に弥生時代の集落あるいは墳墓が存在していたことに間違いはないと考えられる。

古墳時代（図54）

Ⅰ期：須恵器編年でＴＫ208型式以前の段階とするが、山の間遺跡では当該期の須恵器は出土していないため、この集落における須恵器導入以前の段階と位置付けられる。この段階の遺構は少なく、段状遺構３・４が該当する程度である。中でも段状遺構４では多くの土師器が出土したのみならず、滑石製臼玉も発見され注目される。市内における滑石製臼玉の検出事例としては岩田３号墳[4]があげられ、約1,300個の臼玉が出土している。

Ⅱ期：山の間遺跡の集落規模が拡大する時期で、竪穴住居５軒（竪穴住居１・５・９・12・13）があげられる。そのうち、竪穴住居13は一辺約６ｍで、溝18を外周溝としているが、その他の住居は一辺３～５ｍ程度の竪穴住居である。これらの住居はいずれも３分の１程度の検出で全体像は不明ではあるが、住居内にカマドが敷設されていない点は留意すべき点である。

なお、Ⅱ期からⅢ期にかけての過渡期に相当する遺構として、竪穴住居３・４・６・７・14・15、段状遺構５・12・13・15・16、柱穴列１・４があげられる。その中で、竪穴住居３にはカマドが設けられており、この集落におけるカマドの導入時期を示す貴重な事例である。なお、竪穴住居４は竪穴



Ⅱ・Ⅲ期（５世紀後葉～６世紀前半）　　Ⅳ期以降（６世紀後半～７世紀）

図54　時期別遺構図（1/1,000）

住居３の廃絶後に造られた住居であるが、ここではカマドは検出されておらず、その採用は限定的であったのかもしれない。

Ⅲ期：Ⅱ期に引き続き、山の間遺跡の盛行期であり、段状遺構５基（段状遺構８～11・14）、可能性として竪穴住居１軒（竪穴住居11）、段状遺構１基（段状遺構６）などが該当する。この時期の特徴として、竪穴住居11及び段状遺構８～11など調査区下段の北側に遺構が集中する傾向がある。

Ⅳ期：Ⅲ期に引き続き集落が継続して営まれるが、遺構・遺物ともに減少傾向がうかがえる。この時期に該当する遺構は竪穴住居３軒（竪穴住居２・８・10）とこれに付随する遺構（溝２・３、溝７）である。なお、Ⅳ期は須恵器編年でＭＴ85からＴＫ209型式までを対象としているが、これらの遺構から出土する遺物の大半はＴＫ43型式までである。竪穴住居２は一辺875cm を測り、この集落で最大規模の竪穴住居であるが、竪穴住居10は一辺333cm でこの集落で最小である。この時期の竪穴住居はいずれもカマドを備えていることは注目される。Ⅱ～Ⅲ期の竪穴住居でカマドが見られたのは１軒のみであったが、Ⅳ期ではいずれの竪穴住居からもカマドが検出されていることになり、カマドが定着してきたことをうかがわせる。

古墳時代終末期（７世紀）：この時期に該当する遺構は掘立柱建物１と段状遺構１のみである。掘立柱建物１は２×２間の規模をもつ。段状遺構１は竪穴住居２廃絶後に営まれた遺構で、埋土から鉄滓が出土している。本遺跡で鉄滓が出土したのはこの遺構のみであるが、鍛冶炉などの遺構は本遺跡では未検出のため混入したものであろうが、この近辺でこの時期に鉄器生産が行われていた可能性がうかがえる。

古代・中世

山の間遺跡では古代・中世の遺構は検出できていない。しかし、調査区あるいは確認調査で掘り下げたトレンチ内において古代以降の土器が出土しているため、大きな集落規模ではないにしろ、近辺に集落があった可能性が考えられる。

第２節　山の間遺跡の意義

ここまで、山の間遺跡の集落の変遷について整理したが、ここでは、赤磐市内の集落や古墳の動向を踏まえ、山の間遺跡の意義についてふれたい（図55）。

まず、山の間遺跡の営まれた古墳時代中期後葉から後期にかけての周辺の集落遺跡の動態であるが、この時期の集落の主な調査事例としては、隣接する着鋼遺跡[3]のほかに門前池遺跡[5]や斎富遺跡[6]があげられる程度である。着鋼遺跡は、山の間遺跡と一連の集落跡で当該期の竪穴住居１軒分が検出されている。門前池遺跡は弥生時代から続く集落跡であるが、竪穴住居が８軒ほど調査されている。斎富遺跡も弥生時代から営まれた集落であるが、古墳時代中期後半から規模が拡大する。特に斎富遺跡では陶質土器や軟質土器など朝鮮半島に由来する遺物が出土しており、朝鮮半島とつながりのある集団が居住したと評価されているが、山の間遺跡ではそのような朝鮮半島との直接的なつながりを示す資料は見られなかったため、当時の一般的な集落であったと評価できよう。

ところで、山の間遺跡ではカマドを造り付けた住居が４軒検出され、Ⅱ～Ⅲ期にかけてカマドが導入されⅣ期で本格的に普及していることが確認できた。門前池遺跡ではカマドが検出されていないが、斎富遺跡では６世紀前葉の竪穴住居68で住居の建て替えに伴い新しくカマドが導入された事例が報告されており、この地域におけるカマドの導入時期を示す貴重な事例となっている。この傾向は、山の間遺跡と同じであり、今回の調査でもこれを追認する結果となっている。

赤磐市内の古墳時代を語る上で、両宮山古墳築造を嚆矢に活発化する造墓活動はこの地域の独自性を物語る。そして、これらの古墳の築造が、山の間遺跡の２km 圏内で行われていることは、山の間遺跡の重要性を示す。

両宮山古墳は墳長206mを測り、墳丘のまわりに二重の周濠をもつが、古墳の築造時期を特定できる資料は少ない。これまでの発掘調査で土師器が出土しているが古墳時代中期という以上に時期を限定できるものではない。一方、両宮山古墳の南側に隣接する森山古墳では埴輪が出土しているが、この埴輪を分析した宇垣匡雅は、この森山古墳の埴輪がＴＫ208型式の須恵器を伴う宿寺山古墳の埴輪よりも小さいことから、森山古墳を宿寺山古墳につづくＴＫ208～ＴＫ23に位置付けた。そして、両宮山古墳の築造時期をこの森山古墳を下限とし、前方後円墳集成編年[7]の７期後半から末の５世紀後半と考えた[8]。

また、両宮山古墳から少し離れた位置に立地する朱千駄古墳や小山古墳であるが、発掘調査や表採された埴輪等から須恵器編年でＴＫ23・47型式、埴輪編年[9]でⅣ期の５世紀末に築造された古墳と考えられている。また、廻り山古墳では須恵器編年でＭＴ15型式、埴輪編年でⅤ期の埴輪が出土しており、６世紀前半の時期と考えられている[10]。その後、前方後円墳の築造はこの地から少し離れた地域に移動する。

これらの古墳群の動向と山の間遺跡との関係であるが、両宮山古墳の築造が本遺跡の時期区分Ⅰ期に含まれる可能性が高い。また、両宮山古墳に続いて築造される朱千駄・小山古墳がⅡ期、廻り山古墳がⅢ期に該当すると考えられる。このように、山の間遺跡の集落は、調査で判明した範囲ではあるが、両宮山古墳の築造と近い時期に出現し、これらの古墳群の動態と時期的に連動していることが分かる。このことは、山の間遺跡の集落が、これらの古墳群を造営した首長層と密接な関係にあったことをう

西暦	須恵器編年	時期区分（山の間）	時期区分（集成）	山の間遺跡の主な遺構	周辺地域の遺跡	主な出来事
450	TK208以前	Ⅰ期	7期	段状遺構3・4	両宮山古墳	
					森山古墳	
				竪穴住居1	正崎2号墳	
	TK23 TK47	Ⅱ期	8期	竪穴住居5、溝5 竪穴住居9 竪穴住居12・13、溝18	朱千駄古墳 小山古墳	
500				竪穴住居3・4 竪穴住居6・7、溝6 竪穴住居14・15 段状遺構5・12・13・15・16		
	MT15 TK10	Ⅲ期	9期	段状遺構8～11・14	廻り山古墳 別所窯跡	須恵器在地生産開始 カマド普及 横穴式石室導入
	MT85 TK43 TK209	Ⅳ期	10期	竪穴住居2、溝2・3 竪穴住居8、溝7 竪穴住居10	斎富2号墳 鳥取上高塚古墳 岩田14号墳 牟佐大塚古墳	
600				掘立柱建物1 段状遺構1		

着銅遺跡　門前池遺跡　斎富遺跡

図55　山の間遺跡の変遷と周辺遺跡との関係

かがわせる。一方、Ⅲ期以降における首長系譜は山の間遺跡から５km ほど北の砂川中流域北部に移動する。この時期から山の間遺跡の集落規模が縮小するが、この動向が前方後円墳を中心に構成される首長系譜の移動と関係があるのかどうかは興味深いところであるが、今後の調査事例の増加を待っての判断となろう。

これまで、この地域においては、古墳の規模や数に比し、集落遺跡の調査事例が少ない現状があったが、今回の調査で当時の集落の実態の一部を垣間見ることができた。山の間遺跡の調査成果を生かし、今後少しずつ赤磐市の古墳時代の様相が明らかになっていくことが期待される。

注

（1）田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981
（2）赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』　1940
（3）高田恭一郎ほか『着銅遺跡』赤磐市文化財調査報告第７集　岡山県赤磐市教育委員会　2014
（4）神原英朗『岩田第３・５号墳発掘調査概報』山陽団地埋蔵文化財発掘調査団　1971
（5）枝川陽ほか『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告９　岡山県教育委員会　1975
（6）下澤公明ほか『斎富遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105　岡山県教育委員会　1996
（7）近藤義郎編『前方後円墳集成』　山川出版社　1991
（8）宇垣匡雅『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第２集　岡山県山陽町教育委員会　2004
（9）川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第２号　1978
（10）宇垣匡雅『両宮山古墳－二重濠をもつ吉備の首長墓－』　同成社　2006

表3　遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	主軸	床海抜高(m)	柱穴	壁体溝	カマド有無	時期	備考
竪穴住居1	台形	(202)	453	N-60°-W	18.30～18.36	4/4	○	×	Ⅱ	
竪穴住居2	方形	(253)	875	N-72°-W	17.60	不明	○	○	Ⅳ	
竪穴住居3	方形	(207)	489	N-68°-W	18.89	4/4	○	○	Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居4	方形	(210)	561	N-70°-W	18.90	不明	○	×	Ⅱ～Ⅲ	焼失住居
竪穴住居5	方形	(131)	336	N-64°-W	18.12～18.15	不明	○	×	Ⅱ	
竪穴住居6	方形	(164)	(145)	N-60°-W	18.73	不明	○	×	Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居7	方形	(150)	(176)	N-58°-W	18.86	不明	○	×	Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居8	方形	(191)	392	N-65°-W	18.45	不明	○	○	Ⅳ	
竪穴住居9	方形	(235)	486	N-68°-W	17.85	2/4	○	×	Ⅱ	
竪穴住居10	方形	(268)	333	N-53°-W	17.96	不明	○	○	Ⅳ	
竪穴住居11	方形	(150)	499	N-68°-W	14.75	不明	×	×	Ⅲ以前	
竪穴住居12	方形	(195)	(464)	N-60°-W	14.15	2/4	○	×	Ⅱ	
竪穴住居13	方形	(185)	596	N-63°-W	14.02～14.08	2/4	○	×	Ⅱ	
竪穴住居14	方形	(212)	480	N-64°-W	－	不明	○	×	Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居15	方形	(138)	(185)	N-69°-W	－	不明	○	×	Ⅱ～Ⅲ	

掘立柱建物

遺構名	規模(間)	柱間距離(cm)		桁行(cm)	梁間(cm)	面積(㎡)	棟方向	時期	備考
		桁	梁						
掘立柱建物1	2×2	144～182	183～190	326	373	12.16	N-63°-W	7世紀	

段状遺構

遺構名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	床面海抜高(m)	柱穴	時期	備考
段状遺構1	(150)	(700)	84	17.73～17.95	×	7世紀	
段状遺構2	(205)	13	3	－	×	古墳後期	
段状遺構3	(137)	(476)	33	17.7	×	Ⅰ	
段状遺構4	(152)	(483)	30	18.05	×	Ⅰ	滑石製臼玉
段状遺構5	(148)	593	24	18.3	×	Ⅱ～Ⅲ	
段状遺構6	(120)	(875)	21	－	×	Ⅲ以後	
段状遺構7	(57)	346	10	－	×	不明	
段状遺構8	(155)	348	36	14.93	×	Ⅲ	
段状遺構9	(214)	(234)	42	14.8～15.0	×	Ⅲ	
段状遺構10	(134)	(365)	9	14.75	○	Ⅲ	
段状遺構11	(176)	(1,056)	21	14.9	○	Ⅲ	
段状遺構12	(117)	(455)	28	14.6	×	Ⅱ～Ⅲ	
段状遺構13	(147)	660	23	14.2～14.3	○	Ⅱ～Ⅲ	
段状遺構14	(192)	518	42	－	×	Ⅲ	
段状遺構15	(193)	(441)	35	15.24	×	Ⅱ～Ⅲ	
段状遺構16	(173)	(303)	68	15.04	×	Ⅱ～Ⅲ	

土坑

遺構名	平面形	断面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	時期	備考
土坑1	円形	椀形	31	(22)	11	Ⅱ以前	
土坑2	楕円形	不定形	85	79	54	不明	
土坑3	円形	箱形	61	58	64	不明	
土坑4	円形	椀形	69	63	72	不明	
土坑5	円形	椀形	82	76	84	不明	

溝

遺構名	長さ(cm)	上端幅(cm)	深さ(cm)	時期	備考
溝1	(174)	33	17	不明	
溝2	(274)	78	36	Ⅳ	竪穴住居2外周溝
溝3	(884)	78	38	Ⅳ	竪穴住居2外周溝
溝4	(315)	25	12	Ⅱ～Ⅲ	柱穴列1関連？
溝5	(477)	26	13	Ⅱ	竪穴住居5外周溝
溝6	(562)	42	13	Ⅱ～Ⅲ	竪穴住居6・7外周溝
溝7	(880)	52	27	Ⅳ	竪穴住居8外周溝
溝8	(408)	(70)	23	Ⅱ～Ⅲ	
溝9	(204)	16	7	Ⅱ以降	
溝10	(144)	23	9	Ⅱ以降	
溝11	(310)	18	5	Ⅱ以降	
溝12	(364)	26	7	Ⅱ以降	
溝13	(185)	31	15	Ⅱ以降	
溝14	(400)	21	10	Ⅱ以降	
溝15	(396)	24	6	Ⅲ	竪穴住居11外周溝？
溝16	(293)	26	4	Ⅲ	竪穴住居11外周溝？
溝17	(528)	53	23	Ⅱ	
溝18	(1,110)	67	72	Ⅱ	竪穴住居13外周溝
溝19	(330)	21	14	Ⅱ～Ⅲ	

柱穴列

遺構名	規模	長さ(cm)	柱間(cm)	柱穴の深さ(cm)	主軸	時期	備考
柱穴列1	3間	490	128～148	27～56	N-22°-E	Ⅱ～Ⅲ	
柱穴列2	2間	340	152～154	10～19	N-12°-E	不明	
柱穴列3	3間	504	123～160	15～51	N-24°-E	Ⅲ～Ⅳ	
柱穴列4	3間	555	151～190	39～56	N-25°-E	Ⅱ～Ⅲ	

表4　遺物観察表

土器

掲載番号	出土遺構	種別器種	計測値(cm)				色調	胎土	調整ほか	備考
			口径	器高	底径	最大径				
1	T10	須恵器杯身	—	(2.2)	—	(14.4)	灰 N5/	1mm 以下少 黒色土粒少	外・内：ヨコナデ	
2	T8	須恵器壺	—	(9.3)	—	—	灰 N6/	2mm 以下僅 黒色土粒少	外・内：ヨコナデ	
3	T10	土師器甕	13.3	(4.7)	—	—	淡橙 5YR8/4	3mm 以下中 赤色土粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
4	T8	土師器高杯	—	(4.0)	—	—	橙5YR7/8	1mm 以下僅 赤色土粒僅	外：ハケ、内：ナデ	
5	T8	土師器杯	14.4	3.1	10.4	—	灰白10YR8/2	3mm 以下中 赤色土粒少	外・内：ヨコナデ	底部押圧
6	T8	土師器椀	—	(2.3)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm 以下少	外：ヨコナデ、丹塗り 内：ヨコナデ	
7	竪穴住居1	須恵器杯身	10.7	5.1	—	13.2	灰 N6/	1mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
8	竪穴住居2	須恵器杯身	11.0	4.1	—	13.6	青灰5PB6/1	1mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
9	竪穴住居2	土師器甕	13.0	(7.9)	—	14.2	橙7.5YR7/6	2mm 以下多 赤色土粒中	外：ヨコナデ、ハケ 内：ナデ、ハケ	
10	竪穴住居2	土師器甕	20.0	(7.2)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	2mm 以下中 赤色土粒少	外：ヨコナデ、内：不明	
11	竪穴住居2	土師器甕	—	(16.5)	—	—	明黄褐 10YR7/6	2mm 以下多 赤色土粒少	外：不明 内：ナデ？	

掲載番号	出土遺構	種別器種	計測値(cm)				色調	胎土	調整ほか	備考
			口径	器高	底径	最大径				
12	竪穴住居2	土師器壺	—	(22.5)	—	35.9	橙5YR6/6	4mm 以下多 赤色土粒・ 角閃石僅	外：ハケメ 内：ナデ？（磨耗気味）	
13	溝3	須恵器杯身	(11.3)	(2.5)	—	(13.0)	明青灰5PB7/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
14	段状遺構1	須恵器高杯	—	(8.0)	—	—	灰 N6/	1mm 以下少	外・内：ヨコナデ	
15	溝2	土師器甕	(16.0)	(7.0)	—	—	橙7.5YR7/6	3mm 以下中 赤色土粒	外：不明 内：ハケ、ヘラケズリ？	
16	竪穴住居3	須恵器杯蓋	—	(3.1)	—	—	灰7.5Y6/1	1mm 以下少	外・内：ヨコナデ	
17	竪穴住居3	土師器甕	17.0	(8.6)	—	—	明黄褐10YR7/6	2mm 以下少 赤色土粒少	外：ハケ、ヨコナデ 内：ハケ、ナデ、ケズリ？	
18	竪穴住居4	須恵器杯身	10.0	(3.2)	—	12.0	灰 N6/	2mm 以下少 黒色土粒中	外・内：ヨコナデ	
19	竪穴住居4	須恵器杯身	11.0	(3.3)	—	13.4	灰 N6/	3mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
20	竪穴住居4	須恵器杯身	12.0	(2.6)	—	14.0	灰白 N7/	1mm 以下僅	外・内：ヨコナデ	
21	竪穴住居4	須恵器高杯蓋	12.4	5.4	—	—	灰白5Y7/1	2mm 以下中 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 天井部に同心円文	
22	竪穴住居4	須恵器高杯	11.0	10.0	8.5	12.9	灰白 N7/	1mm 以下少 黒色土粒中	外：ヨコナデ、カキメ 内：ヨコナデ	三角形3方向透かし
23	竪穴住居4	須恵器高杯	—	(3.1)	(8.2)	—	灰 N6/	2mm 以下少 黒色土粒少	外・内：ヨコナデ	円形5方向？透かし
24	竪穴住居4	須恵器高杯	—	(4.9)	8.2	—	灰白 N7/	1mm 以下少 黒色土粒少	外・内：ヨコナデ	方形4方向透かし
25	竪穴住居4	須恵器高杯	11.0	9.0	8.4	13.5	青灰5PB6/1	1mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、 底部に同心円文	方形3方向透かし
26	竪穴住居4	須恵器壺	10.0	4.9	—	—	灰7.5Y5/1	2mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
27	竪穴住居4	須恵器蓋	12.4	(4.2)	—	—	灰 N5/	4mm 以下少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ	
28	竪穴住居4	須恵器蓋	11.0	12.0	—	—	灰 N5/	2mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、タタキ、 櫛描波状文 内：ヨコナデ	ほぼ完形
29	竪穴住居4	須恵器壺	—	(14.3)	—	22.2	灰白 N7/	1mm 以下少	外：タタキ、凹線 内：タタキ後スリケシ	
30	溝4	須恵器杯蓋	—	(3.0)	—	—	灰白 N7/	2mm 以下少	外・内：ヨコナデ	
31	竪穴住居5	須恵器杯蓋	12.0	(4.9)	—	—	灰 N6/	2mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
32	竪穴住居7	須恵器杯蓋	12.0	(4.3)	—	—	灰白 N7/	2mm 以下少 黒色土粒僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
33	竪穴住居7	須恵器杯身	10.8	4.1	—	13.0	明青灰5PB7/1	5mm 以下中 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
34	竪穴住居7	須恵器壺	15.0	(7.7)	—	—	青灰5PB5/1	2mm 以下中	外：ヨコナデ、 タタキ後カキメ 内：タタキ後スリケシ	
35	竪穴住居8	須恵器杯身	12.4	3.7	—	15.0	青灰5PB6/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
36	竪穴住居8	須恵器杯身	13.3	3.7	—	15.6	灰 N5/	2mm 以下多 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 底部に同心円文	ほぼ完形
37	竪穴住居8	須恵器杯身	13.2	(3.3)	—	15.0	明青灰5PB7/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
38	竪穴住居8	須恵器杯身	11.0	4.0	—	13.4	灰 N5/	1mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 底部に同心円文	
39	竪穴住居8	須恵器蓋	(12.6)	(1.6)	—	—	灰7.5Y5/1	1mm 以下僅	外・内：ヨコナデ	
40	竪穴住居8	土師器甕	19.8	31.0	—	27.2	橙2.5YR6/8	3mm 以下多 赤色土粒中	外：ハケ、ナデ 内：ナデ、ヘラケズリ	
41	竪穴住居9	須恵器杯蓋	(13.0)	(4.1)	—	—	灰 N6/	1mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
42	竪穴住居9	須恵器杯身	9.4	4.4	—	12.0	青灰5PB5/1	2mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
43	竪穴住居9	須恵器高杯	—	(4.6)	9.4	—	灰白 N7/	2mm 以下少	外：ヨコナデ、カキメ 内：ヨコナデ	方形4方向透かし
44	竪穴住居9	須恵器壺	—	(5.3)	—	14.6	灰 N7/	1mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ、ユビオサエ	

掲載番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm) 口径	 器高	 底径	 最大径	色調	胎土	調整ほか	備考
45	竪穴住居9	土師器 壺	6.6	(4.3)	—	7.4	橙5YR7/6	2mm 以下中 赤色土粒少	外：ナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
46	竪穴住居9	土師器 壺	7.6	(5.9)	—	9.0	橙5YR7/6	2mm 以下中 赤色土粒中	外：ナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
47	溝7	須恵器 杯蓋	13.0	(4.2)	—	—	灰白5Y7/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	焼成不良
48	溝7	須恵器 杯身	12.6	(2.7)	—	14.8	灰白5Y8/1	1mm 以下僅	外・内：ヨコナデ	
49	溝7	須恵器 杯身	13.1	(3.2)	—	16.0	青灰5PB6/1	1mm 以下中 黒色土粒中	外・内：ヨコナデ	
50	溝7	須恵器 杯身	13.0	4.9	—	16.3	灰 N6/	2mm 以下少 黒色土粒中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
51	溝7	土師器 甕	16.6	(6.0)	—	—	橙7.5YR7/6	3mm 以下中	外・内：ナデ	
52	溝7	土師器 甕	10.6	(12.5)	—	14.4	にぶい黄橙 10YR6/3	4mm 以下多 赤色土粒少	外：ナデ 内：ヨコナデ、ユビオサエ	
53	竪穴住居10	須恵器 杯蓋	14.0	4.2	—	—	灰白5Y7/1	2mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	焼成不良
54	竪穴住居10	須恵器 杯身	12.5	4.6	—	14.9	暗青灰 5PB4/1	4mm 以下中 黒色土粒中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
55	竪穴住居10	須恵器 高杯	—	(3.0)	8.4	—	灰10Y5/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、カキメ 内：ヨコナデ	方形透かし
56	竪穴住居10	土師器 甕	11.4	8.4	—	—	明黄褐 10YR6/6	5mm 以下多	外・内：ナデ、ユビオサエ	二次焼成
57	段状遺構4	土師器 壺	19.2	(27.4)	—	36.3	橙5YR6/8	3mm 以下中 精良粘土	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ	
58	段状遺構4	土師器 壺	19.6	(36.8)	—	35.4	橙7.5YR6/6	4mm 以下多 赤色土粒多	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ？	
59	段状遺構4	土師器 甕	17.6	(28.4)	—	28.6	橙7.5YR7/6	4mm 以下中 赤色土粒中	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
60	段状遺構4	土師器 甕	23.6	(12.1)	—	—	橙5YR7/6	4mm 以下多 赤色土粒少	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
61	段状遺構4	土師器 高杯	—	(8.1)	—	—	橙7.5YR7/6	3mm 以下中 赤色土粒中	外・内：ナデ？	
62	段状遺構4	手捏土器	3.7	2.2	—	—	橙5YR6/8	7mm 以下多	外・内：ナデ、ユビオサエ	ほぼ完形
63	段状遺構4 周辺	須恵器 杯蓋	12.8	4.7	—	—	青灰5PB5/1	3mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
64	段状遺構4 周辺	須恵器 高杯	—	(5.9)	11.0	—	灰白 N7/	1mm 以下少	外・内：ヨコナデ	方形 4 方向 透かし
65	段状遺構4 周辺	土師器 高杯	—	(5.4)	—	—	橙5YR7/8	4mm 以下多 赤色土粒少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ？	
66	段状遺構4 周辺	土師器 把手	残存長 (5.5)	幅 3.3	厚さ 3.0	—	黄橙10YR8/6	2mm 以下中 赤色土粒少	外・内：ナデ	
67	段状遺構5	須恵器 杯蓋	12.5	4.8	—	—	灰 N6/	2mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
68	段状遺構5	須恵器 蓋	11.0	(4.6)	—	—	暗青灰 5PB4/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ	
69	段状遺構5	手捏土器	—	(3.5)	1.3	4.4	橙5YR7/6	2mm 以下中 赤色土粒中	外・内：ナデ	
70	段状遺構5	土師器 鉢	7.0	5.3	5.0	—	橙7.5YR7/6	2mm 以下中 赤色土粒中	外・内：ナデ、ユビオサエ	
71	溝10	須恵器 高杯	—	(5.0)	8.6	—	灰 N6/	1mm 以下少 黒色土粒僅	外・内：ヨコナデ	方形 4 方向 透かし
72	段状遺構8	須恵器 杯蓋	13.8	4.5	—	—	灰 N6/	3mm 以下中 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 天井部に同心円文	
73	段状遺構8	須恵器 杯身	11.8	5.3	—	14.0	灰 N6/	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
74	段状遺構8	須恵器 杯身	13.4	4.6	—	15.7	灰 N6/	3mm 以下多 黒色土粒中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
75	段状遺構8	須恵器 杯身	12.6	3.7	—	15.0	青灰5PB6/1	3mm 以下中 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	ヘラ記号
76	段状遺構8	須恵器 甕	—	(13.3)	—	(32.3)	灰白2.5Y7/1	2mm 以下少 赤色土粒少	外：タタキ 内：タタキ後ユリセシ	焼成不良
77	段状遺構8	土師器 把手	残存長 6.0	幅 2.5	厚さ 2.0	—	淡黄橙 7.5YR8/4	4mm 以下多 黒色土粒少	外：ナデ	
78	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯蓋	13.4	(5.0)	—	—	灰白 N7/	1mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 天井部に同心円文	
79	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯蓋	13.3	4.6	—	—	灰白 N7/	1mm 以下少 黒色土粒僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	

掲載番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色調	胎土	調整ほか	備考
			口径	器高	底径	最大径				
80	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯蓋	14.6	4.7	—	—	紫灰5P6/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	ヘラ記号
81	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯蓋	14.2	4.8	—	—	青灰5PB6/1	1mm 以下僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
82	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯身	12.0	4.2	—	14.1	青灰5PB5/1	4mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
83	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯身	11.6	5.0	—	14.1	明青灰 5PB7/1	1mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
84	段状遺構 8・9周辺	須恵器 杯身	11.6	5.6	—	14.2	灰白 N7/	1mm 以下僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 底部に同心円文	
85	段状遺構 8・9周辺	土師器 甕	17.8	(5.1)	—	—	淡黄橙 7.5YR8/4	3mm 以下多 赤色土粒中	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ？ヘラケズリ	
86	段状遺構 8・9周辺	土師器 把手	残存長 (6.2)	幅 2.6	厚さ 2.1	—	淡黄橙 7.5YR8/4	2mm 以下中 赤色土粒少	外・内：ナデ	
87	段状遺構 8・9周辺	土師器 把手	残存長 (6.1)	幅 3.9	厚さ 3.2	—	淡黄橙 10YR8/4	3mm 以下多 赤色土粒少	外・内：ナデ	
88	段状遺構 8・9周辺	土師器 土錘	—	(2.9)	—	—	橙7.5YR7/6	1mm 以下少 赤色土粒少	外・内：調整不明	
89	段状遺構 8・9周辺	手捏土器	4.4	2.1	—	—	淡黄橙 10YR8/3	3mm 以下中 赤色土粒中	外・内：ナデ	
90	段状遺構11	須恵器 杯蓋	14.8	4.9	—	—	灰 N6/	3mm 以下中 赤色土粒僅 黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 天井部に同心円文	焼成不良
91	段状遺構11	須恵器 杯身	13.0	(5.0)	—	16.0	灰7.5Y5/1	2mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
92	段状遺構11	須恵器 壺	15.0	(3.1)	—	—	青灰5PB6/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ	
93	段状遺構11	須恵器 蓋	—	(3.0)	—	—	灰白 N7/	1mm 以下少	外・内：ヨコナデ	
94	段状遺構11	須恵器 甕	—	(16.9)	—	—	青灰5PB5/1	2mm 以下少	外：タタキのち一部ハケ 内：同心円文	
95	段状遺構11	土師器 甕	—	(3.9)	—	—	淡黄橙 10YR8/3	3mm 以下中 赤色土粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
96	段状遺構13	須恵器 杯身	10.4	(4.4)	—	12.7	青灰5PB5/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
97	段状遺構13	須恵器 杯身	11.0	(3.5)	—	13.0	灰白5Y7/1	1mm 以下少 赤色土粒僅	外・内：ヨコナデ	
98	段状遺構13	須恵器 杯身	11.0	4.7	—	13.4	青灰5PB6/1	2mm 以下中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
99	段状遺構13	須恵器 杯身	—	(3.9)	—	15.2	灰白 N7/	1mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
100	段状遺構13	土師器 甕	19.0	(9.9)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/3	2mm 以下多 角閃石多 赤色土粒少	外：ヨコナデ、ミガキ？ ハケ？ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ？	
101	竪穴住居12	須恵器 杯蓋	12.5	(5.1)	—	—	青灰5PB6/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
102	竪穴住居13	須恵器 杯身	10.8	(4.6)	—	13.2	灰白 N7/	1mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
103	竪穴住居13	須恵器 蓋	10.4	11.4	—	10.4	灰 N5/	2mm 以下中	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ユビオサエ	
104	竪穴住居13	須恵器 高杯	—	(3.6)	8.6	—	灰白 N7/	1mm 以下少	外・内：ヨコナデ	方形？透かし
105	竪穴住居13	須恵器 高杯	—	(9.0)	(4.9)	—	灰白7.5Y7/1	1mm 以下少 黒色土粒僅	外：ヨコナデ、カキメ 内：ヨコナデ	方形 4 方向透かし
106	竪穴住居13	土師器 把手	残存長 (8.7)	幅 3.4	厚さ 2.5	—	浅黄橙 10YR8/4	5mm 以下多 赤色土粒少	外・内：ナデ	
107	竪穴住居13	土師器 甕	22.0	(28.1)	—	29.4	浅黄橙 7.5YR8/4	4mm 以下多 赤色土粒中	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
108	竪穴住居 12・13周辺	須恵器 杯身	(10.4)	(4.4)	—	(13.2)	青灰5PB5/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
109	竪穴住居 12・13周辺	須恵器 杯身	—	(3.8)	—	13.6	灰白7.5Y7/1	2mm 以下少 黒色土粒僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
110	竪穴住居 12・13周辺	須恵器 高杯	(14.0)	(5.3)	—	—	灰 N5/	1mm 以下少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ	
111	竪穴住居 12・13周辺	土師器 甕	15.0	(5.1)	—	—	橙5YR7/6	2mm 以下中 角閃石少 赤色土粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
112	溝18	須恵器 杯身	(11.5)	(3.2)	—	(13.4)	青灰5PB5/1	1mm 以下僅	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
113	溝18	須恵器 高杯	—	(3.4)	7.0	—	青灰5PB6/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	方形 4 方向透かし

掲載番号	出土遺構	種別器種	計測値(cm)				色調	胎土	調整ほか	備考
			口径	器高	底径	最大径				
114	溝18	須恵器壺	(19.0)	(3.3)	—	—	青灰5PB6/1	4mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ、カキメ 内：ヨコナデ	
115	溝18	土師器甕	(22.8)	(9.3)	—	—	浅黄橙 7.5YR8/4	2mm 以下中 赤色土粒中	外：ヨコナデ、ハケ 内：ハケ、ケラケズリ、 ナデ	
116	段状遺構14	須恵器壺蓋	10.4	(3.7)	—	—	青灰5PB5/1	4mm 以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
117	段状遺構14	土師器不明	—	(5.5)	—	—	浅黄橙 10YR8/3	3mm 以下多 赤色土粒少	外：ハケ 内：ハケ、ユビオサエ	
118	段状遺構14	土師器甕	18.0	(16.0)	—	26.0	浅黄橙 7.5YR8/6	4mm 以下中 角閃石少 赤色土粒中	外：ハケ？ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ、 ナデ	
119	掘立柱建物1	須恵器杯身	—	(3.2)	—	(13.4)	灰 N6/	2mm 以下中 黒色土粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
120	掘立柱建物1	須恵器杯蓋	—	(2.2)	—	—	灰 N5/	1mm 以下多 黒色土粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
121	掘立柱建物1	須恵器高杯	—	(0.9)	—	—	灰白 N7/	1mm 以下中	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
122	段状遺構15	須恵器杯蓋	(12.8)	(4.6)	—	—	褐灰5YR6/1	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
123	段状遺構15	須恵器杯身	10.0	4.8	—	12.0	灰 N6/	2mm 以下中 黒色土粒僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	ほぼ完形
124	段状遺構15 T10	須恵器杯身	10.7	(4.3)	—	13.2	青灰5PB5/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
125	段状遺構15	土師器甕	14.0	(5.7)	—	—	橙5YR6/6	5mm 以下多 赤色土粒中	外・内：磨耗により不明	
126	段状遺構16	須恵器壺	(13.0)	(4.6)	—	—	灰5Y6/1	1mm 以下中 黒色土粒少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ	
127	段状遺構16	須恵器蓋	—	(4.0)	—	—	灰 N4/	1mm 以下少	外：ヨコナデ、櫛描列点文 内：ヨコナデ	
128	段状遺構16	須恵器高杯	—	(3.2)	—	—	暗青灰 5PB4/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、櫛描波状文 内：ヨコナデ	
129	段状遺構16	須恵器高杯	—	(4.8)	7.8	—	青灰5PB5/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ、カキメ 内：ヨコナデ	方形 4 方向透かし
130	段状遺構16	土師器甕	(12.8)	(4.8)	—	—	橙7.5YR7/6	1mm 以下少 角閃石少 赤色土粒少	外：ナデ 内：ナデ、ユビオサエ	
131	段状遺構16	土師器高杯	—	(9.1)	10.2	—	橙5YR6/6	2mm 以下中 角閃石少 精良粘土	外：ナデ 内：ナデ、ハケ	
132	段状遺構16	土師器鉢	11.5	6.0	6.6	—	浅黄橙 10YR8/4	4mm 以下多 赤色土粒中	外・内：ナデ	ほぼ完形
133	段状遺構16	土師器甑	21.8	(24.5)	—	—	にぶい黄橙 10YR7/4	3mm 以下中 角閃石多 赤色土粒中	外・内：ハケ、ナデ	
134	段状遺構 15・16周辺	須恵器杯蓋	14.0	(4.0)	—	—	灰白 N7/	4mm 以下中 黒色土粒中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ 天井部に同心円文	
135	段状遺構 15・16周辺	須恵器杯身	(11.0)	(2.4)	—	(13.4)	灰白 N7/	1mm 以下少 黒色土粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
136	段状遺構 15・16周辺	土師器椀	—	(5.3)	—	—	浅黄橙 10YR8/3	3mm 以下中 赤色土粒少	外：ナデ 内：ナデ？	把手付
137	竪穴住居14	須恵器杯蓋	—	(2.8)	—	—	青灰5PB6/1	1mm 以下少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
138	包含層	弥生土器壺	18.8	(6.2)	—	—	橙7.5YR7/6	2mm 以下中 角閃石中 赤色土粒少	外：ヨコナデ、ハケ 刺目文突帯 内：ヨコナデ	
139	包含層	弥生土器壺	13.2	(6.6)	—	—	浅黄橙 10YR8/3	5mm 以下多 角閃石少 赤色土粒少	外：ヨコナデ、箆描沈線 内：ヨコナデ	
140	包含層	弥生土器甕	13.4	16.9	5.7	14.8	にぶい橙 7.5YR6/4	3mm 以下多 角閃石中 赤色土粒少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
141	掘立柱建物1　P 3	弥生土器高杯	(22.0)	(2.9)	—	—	橙2.5YR7/6	3mm 以下中 角閃石少	外：ヨコナデ、凹線？ 内：不明	
142	包含層	弥生土器高杯	—	(3.6)	12.0	14.0	橙5YR7/6	2mm 以下多 赤色土粒少	外：ヨコナデ、箆描沈線 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	円形透かし
143	段状遺構4 周辺	弥生土器器台	—	(3.8)	(15.0)	—	橙7.5YR7/6	2mm 以下少 赤色土粒少	外：ヨコナデ、箆描沈線 内：ヨコナデ	三角 形？透かし
144	包含層	弥生土器器台	—	(6.1)	—	—	橙5YR6/6	3mm 以下多 赤色土粒少	外：ヨコナデ、箆描沈線 内：ヘラケズリ	円形透かし 方形透かし
145	包含層	弥生土器器台	—	(5.1)	—	—	明赤褐 2.5YR5/6	3mm 以下中 角閃石少 赤色土粒少	外：ナデ、凹線？、竹管文 内：ナデ	円形透かし 三角 形？透かし

掲載番号	出土遺構	種別器種	計測値(cm)				色調	胎土	調整ほか	備考
			口径	器高	底径	最大径				
146	包含層	弥生土器器台	(30.0)	(5.0)	—	—	橙5YR6/6	3mm 以下中角閃石少赤色土粒少	外：ナデ、擬凹線、斜衝文内：ナデ	
147	包含層	弥生土器器台	—	(4.8)	—	—	橙5YR6/8	3mm 以下多赤色土粒僅	外：ヨコナデ、斜衝文内：ヨコナデ	
148	包含層	弥生土器器台	—	(4.2)	29.6	—	明赤褐5YR5/6	4mm 以下多角閃石僅赤色土粒少	外：ナデ、斜衝文内：ナデ	
149	包含層	須恵器杯蓋	13.6	4.9	—	—	灰白7.5Y7/1	2mm 以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ？内：ヨコナデ	焼成不良
150	包含層	須恵器杯蓋	14.2	4.6	—	—	灰7.5Y4/1	1mm 以下僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ天井部に同心円文	
151	包含層	須恵器杯蓋	15.1	4.7	—	—	灰 N4/	1mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ天井部に同心円文	
152	包含層	須恵器杯身	10.0	4.7	—	12.4	灰白 N7/	2mm 以下中黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ	
153	包含層	須恵器杯身	11.1	5.0	—	13.6	青灰5PB5/1	2mm 以下少黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ	
154	包含層	須恵器杯身	13.0	(4.7)	—	15.8	灰 N6/	3mm 以下多黒色土粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ	
155	包含層	須恵器壺蓋	10.0	3.5	—	—	灰 N5/	3mm 以下中黒色土粒中	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ	
156	包含層	須恵器壺	8.0	(5.2)	—	11.8	青灰5PB6/1	2mm 以下中	外・内：ヨコナデ	
157	包含層	須恵器壺	—	(9.0)	—	13.2	オリーブ灰5GY6/1	1mm 以下少黒色土粒少	外：ヨコナデ、タタキ、沈線、櫛描波状文内：ヨコナデ、ユビオサエ	
158	包含層	須恵器高杯蓋	(12.4)	4.7	—	—	灰 N5/	2mm 以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ	
159	包含層	須恵器高杯	10.0	(4.7)	—	11.6	灰白 N7/	1mm 以下少黒色土粒僅	外・内：ヨコナデ	
160	包含層	須恵器高杯	—	(4.1)	8.8	—	青灰5PB6/1	2mm 以下少黒色土粒少	外：ヨコナデ、カキメ内：ヨコナデ	円形 4 方向透かし
161	包含層	須恵器鉢	—	(8.0)	—	10.0	灰 N6/	2mm 以下少	外：ナデ、カキメ、ハケ櫛描列点文内：ヨコナデ	
162	包含層	須恵器壺	—	(5.0)	—	—	灰 N5/1	2mm 以下少	外：タタキ後カキメ内：タタキ後スリケシ	
163	包含層	須恵器壺	17.4	(10.0)	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	3mm 以下中	外：タタキ後カキメ内：タタキ後スリケシ	焼成不良
164	包含層	須恵器杯蓋	—	(2.2)	—	—	灰白 N8/	2mm 以下少	外：ヨコナデ内：ヨコナデ	焼成不良
165	包含層	須恵器杯蓋	(18.0)	(1.8)	—	—	灰白 N8/	1mm 以下少	外・内：ヨコナデ	
166	包含層	須恵器杯蓋	—	(1.8)	—	—	灰白2.5Y8/2	1mm 以下少赤色土粒僅	外・内：ヨコナデ	焼成不良
167	包含層	須恵器椀	—	(1.8)	8.0	—	灰白 N8/	1mm 以下僅	外：ヨコナデ、ヘラケズリ内：ヨコナデ	
168	包含層	土師器甕	15.0	(5.1)	—	—	橙2.5YR6/6	4mm 以下多赤色土粒中	外・内：ナデ？	二次焼成
169	包含層	手捏土器	4.3	1.7	—	—	にぶい黄橙10YR7/4	2mm 以下中角閃石少赤色土粒少	外・内：ナデ	
170	包含層	手捏土器	4.0	1.7	2.4	—	にぶい橙7.5YR7/6	2mm 以下中	外・内：ナデ	
171	包含層	手捏土器	6.3	2.7	2.6	—	浅黄橙10YR8/3	2mm 以下中	外・内：ナデ	製塩土器か
172	包含層	土師器高杯	—	(7.0)	8.0	—	にぶい黄橙10YR7/4	1mm 以下中角閃石少赤色土粒少	外・内：ナデ	
173	包含層	土師器甑	—	(11.0)	—	—	浅黄橙10YR8/3	3mm 以下多	外・内：ナデ？	
174	包含層	土師器甑	—	(9.5)	(6.0)	—	にぶい橙7.5YR7/3	2mm 以下多赤色土粒多	外：ナデ内：ナデ、ヘラケズリ	
175	包含層	土師器椀	—	(1.6)	(5.8)	—	淡橙5YR8/3	2mm 以下中	外：ヨコナデ内：ナデ	

口径の（数値）は、その残存率が1/6以下であることを示す。その他の項目の（数値）は残存最大値を示す。
色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
胎土は次の例のとおり省略して記してある。
（例）1mm 以下の砂粒（長石、石英）を多く含み、赤色土粒を多く含む。→ 1mm 以下多、赤色土粒多

石製品

掲載番号	出土遺構	器種	計測値(cm)			重量(g)	石材	残存状況	備考
			長さ	幅	厚さ				
S 1	段状遺構 8	砥石	(13.4)	11.7	4.8	(1,320)	砂岩か(未鑑定)	1/2程度欠損か	被熱痕跡あり
S 2	包含層	石鏃	(2.0)	1.9	0.4	1.4	サヌカイト	先端一部欠損	

土製品

掲載番号	出土遺構	器種	計測値(cm)			重量(g)	色調	残存状況	備考
			長さ	幅	厚さ				
C 1	竪穴住居 9	不明	4.9	3.3	1.7	14.5	橙5YR6/6	完形	
C 2	包含層	環状土製品	(6.0)	2.4	1.4	(25.5)	にぶい橙7.5YR7/4	1/8程度残存	
C 3	包含層	紡錘車	(2.6)	(4.4)	2.5	(24)	橙5YR7/6	一部欠損	

金属製品

掲載番号	出土遺構	器種	計測値(cm)			重量(g)	残存状況	備考
			長さ	幅	厚さ			
M 1	T 8	不明	(5.0)	1.4	0.9	(14.3)	2片残存	
M 2	柱穴列 3 P1	工具?	(8.0)	(1.4)	(1.3)	(22.2)	先端、袋部一部欠損	
M 3	段状遺構 15・16周辺	不明	(3.4)	0.8	0.3	(3.5)	破片	

玉製品

掲載番号	出土遺構	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	残存状況	備考
			直径	厚さ	孔径				
J 1	段状遺構 4	臼玉	5.0	1.3	1.4	0.04	滑石	ほぼ完形	
J 2	段状遺構 4	臼玉	4.7	2.1	1.3	0.07	滑石	ほぼ完形	
J 3	段状遺構 4	臼玉	4.8	2.8	1.1	0.11	滑石	完形	
J 4	段状遺構 4	臼玉	4.9	2.7	1.5	0.09	滑石	ほぼ完形	
J 5	段状遺構 4	臼玉	5.0	3.0	1.5	0.09	滑石	ほぼ完形	
J 6	段状遺構 4	臼玉	5.0	3.2	1.5	0.10	滑石	完形	
J 7	段状遺構 4	臼玉	(4.7)	2.1	(2.0)	(0.03)	滑石	一部欠損	

表５　遺構名称新旧対照表

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
竪穴住居１	２区	№39住居	段状遺構15	１区	№９ａ
竪穴住居２	２区拡張	№42住居	段状遺構16	１区	№９ｂ、№９南
竪穴住居３	２区	№１住居	土坑１	２区	焼土坑
竪穴住居４	２区	№２住居	土坑２	２区	№36・38土坑
竪穴住居５	２区	№17住居	土坑３	２区	№21土坑
竪穴住居６	２区	№43住居	土坑４	２区	№20土坑
竪穴住居７	２区	№27・43住居	土坑５	２区	№19土坑
竪穴住居８	２区	№14住居	溝１	２区拡張	№40溝
竪穴住居９	２区	№15住居	溝２	２区拡張	№45Ｇ区
竪穴住居10	２区	№４ｃ－ｄ間住居	溝３	２区拡張	№45Ａ・Ｂ区
竪穴住居11	３区	№３住居	溝４	２区	№37溝
竪穴住居12	１区	№15住居	溝５	２区	№16溝
竪穴住居13	１区	№15住居	溝６	２区	№22溝
竪穴住居14	１区	№６住居	溝７	２区	№13溝
竪穴住居15	１区	№７住居	溝８	２区	№27溝
掘立柱建物１	１区	№16pit １～３・４～６、№18・19pit	溝９	２区	№12溝
段状遺構１	２区拡張	№45Ｃ・Ｅ・Ｆ区	溝10	３区	№14溝
段状遺構２	２区	№18住居	溝11	３区	№15溝
段状遺構３	２区	№８住居	溝12	３区	№17溝
段状遺構４	２区	№４ａ住居	溝13	３区	№16溝
段状遺構５	２区	№９住居	溝14	３区	№13溝
段状遺構６	２区	№７住居	溝15	３区	№６溝
段状遺構７	２区	№５溝	溝16	３区	№７溝
段状遺構８	３区	№２東	溝17	１区	番号なし
段状遺構９	３区	№２西	溝18	１区	№10溝
段状遺構10	３区	№５住居	溝19	１区	№８溝
段状遺構11	１区・３区	１区・３区№１溝、Pit １～４	柱穴列１	２区	№23～26土坑
段状遺構12	３区	№４住居	柱穴列２	２区	№28～30土坑
段状遺構13	１・３区	№13住居、同住居内 Pit １～５	柱穴列３	２区	№31～35土坑
段状遺構14	１区	№14溝	柱穴列４	１区	№２～５土坑

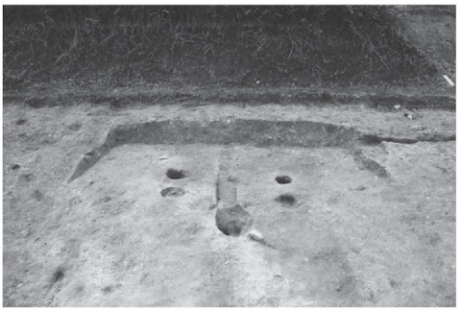
1　調査前風景（東から）

2　調査区下段遺構検出状況（東から）

図版２

１　調査区上段遺構検出状況（南から）

２　調査区下段遺構検出状況（南から）



１　竪穴住居１（南東から）

２　竪穴住居２、溝２・３、
段状遺構１（南から）

３　竪穴住居３（南から）

図版４

１　竪穴住居３カマド
（南東から）

２　竪穴住居４（南から）

３　柱穴列１、溝４
（東から）

1　竪穴住居５、溝５
（南東から）

2　竪穴住居７、溝６・７、
柱穴列３（西から）

3　竪穴住居８・９、溝７
（南から）

図版６

1　竪穴住居８（南東から）

2　竪穴住居９（南東から）

3　竪穴住居10（南東から）

1　竪穴住居10カマド内
遺物出土状況（南東から）

2　段状遺構３（南東から）

3　段状遺構４・５
（南東から）

図版８

1　溝10～14（南東から）

2　竪穴住居11、段状遺構８、
溝15・16（南東から）

3　段状遺構８
遺物出土状況（東から）

1　段状遺構９・10（南東から）

2　段状遺構11～13（南から）

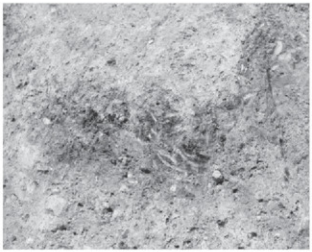
3　段状遺構13（南東から）

図版10

1　柱穴列4（南から）

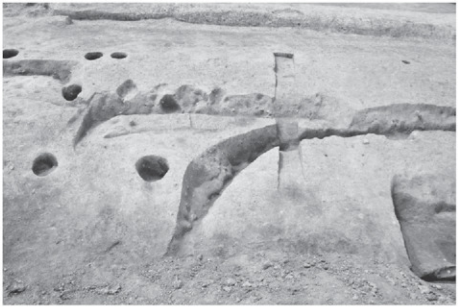
2　竪穴住居12・13、溝17・18（南東から）

3　竪穴住居13　木材圧痕？（南東から）



4　竪穴住居13　骨片出土状況（南東から）

1　竪穴住居12・13、
溝17・18（南から）



2　段状遺構14（南東から）

3　掘立柱建物1（東から）

図版12

1　段状遺構15・16
（南東から）

2　段状遺構16遺物出土状況
（東から）

3　竪穴住居14・15、溝19
（西から）

1　竪穴住居１出土土器

2　竪穴住居２出土土器

3　段状遺構１出土土器

4　竪穴住居４出土土器

5　竪穴住居８出土土器

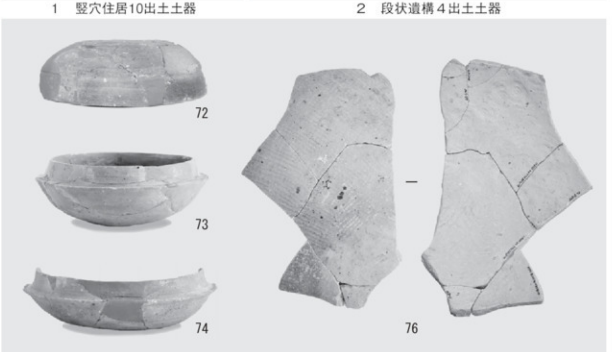
6　竪穴住居７出土土器

7　溝７出土土器

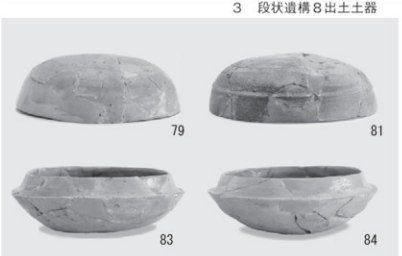
図版14

1　竪穴住居10出土土器

2　段状遺構４出土土器



3　段状遺構８出土土器

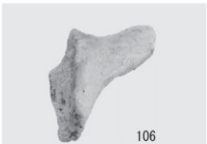


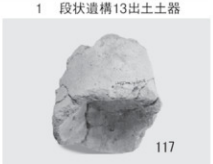
4　段状遺構８・９周辺出土土器

5　段状遺構11出土土器

1　段状遺構13出土土器

2　竪穴住居12出土土器





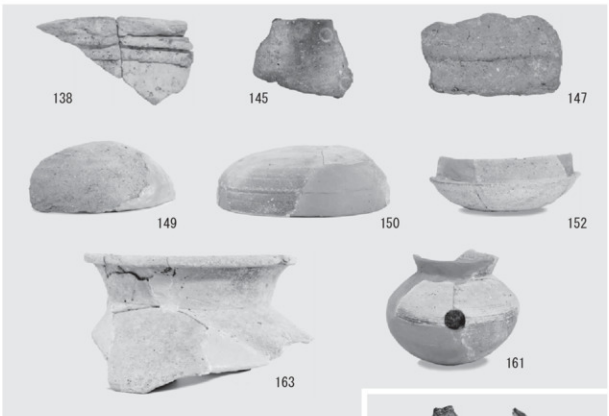
3　段状遺構14出土土器

4　竪穴住居13出土土器

5　段状遺構15・16出土土器

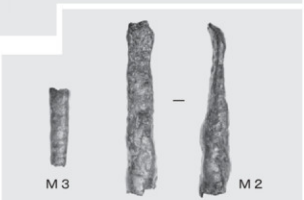
6　段状遺構15・16周辺出土土器

図版16

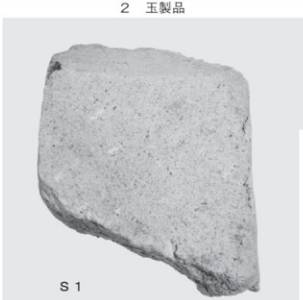


1　包含層等出土土器

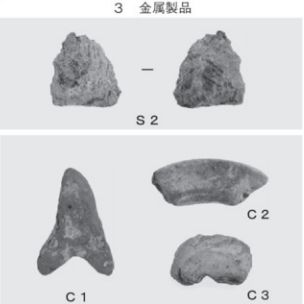
2　玉製品



3　金属製品



4　石製品



5　土製品

報告書抄録

ふりがな	やまのまいせき
書名	山の間遺跡
副書名	あかいわ山陽総合流通センター整備事業に伴う発掘調査２
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告
シリーズ番号	11
編著者名	金田善敬　有賀祐史
編集機関	岡山県赤磐市教育委員会
所在地	〒709-0816　岡山県赤磐市下市337　TEL 086-955-0710　FAX 086-955-0758
発行年月日	2017年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
山の間遺跡	岡山県赤磐市長尾	33213	333220358	34°44′16″	134°1′6″	20150402 ～ 20150617	1,850	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山の間遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居15、段状遺構16、掘立柱建物１、柱穴列４、土坑5、溝19	弥生土器、土師器、須恵器、石製品、土製品、金属製品、玉	丘陵南東斜面に立地する古墳時代中期後半から後期にかけての集落跡

要約

山の間遺跡は、北東方向にのびる丘陵の南東側斜面に位置する。畑や果樹園の造成によって土地改変を受けていたが、掘削が及んでいない箇所で遺構が比較的良好な状態で検出された。

確認した遺跡は主に古墳時代中期後半から後期にかけての集落で、竪穴住居や掘立柱建物、段状遺構などが発見された。竪穴住居は方形のものが多く、カマドが敷設されているものとそうでないものがあった。カマドは５世紀末葉の竪穴住居には見られず６世紀前葉から検出されることから、このころ当地域においてカマドが普及したものと考えられる。出土遺物は須恵器や土師器が中心であるが、中には滑石製臼玉のような貴重な遺物もあった。

遺構としては確認されていないが、出土遺物から、山の間遺跡を含む丘陵上には弥生時代の集落あるいは墳墓が存在したことが想定される。また、古代から中世の遺物も見られることから、周辺にはその時代の集落があった可能性が高い。

山の間遺跡が営まれた古墳時代中期後半から後期は、赤磐市内で両宮山古墳をはじめとする古墳群が形成された時期であるが、これまでこの時期の集落跡の調査事例は多くなかった。今回の調査でこの重要な時期における古墳時代集落の様相をうかがうことができた。

赤磐市文化財調査報告　第11集

山の間遺跡

あかいわ山陽総合流通センター整備事業に伴う発掘調査２

平成29年２月10日　印刷
平成29年２月28日　発行

編集・発行　岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印　刷　山陽印刷株式会社
岡山県岡山市北区富吉3098-1